



よま

平成10年4月1日 発行

No. 11

社団法人 日本山岳会山形支部
〒990-0823 山形市下条町 5-8-16
長岡伸恭方 TEL・FAX 0236(84)8149

★ ジョムソン街道トレッキング 報告特集 ★

計画実施までの経緯と
準備の概要… 3
ジョムソン街道トレッキング
計画書の概要… 8
トレッキング地図… 11
行動記録… 12
決算書・三浦繁司 … 25

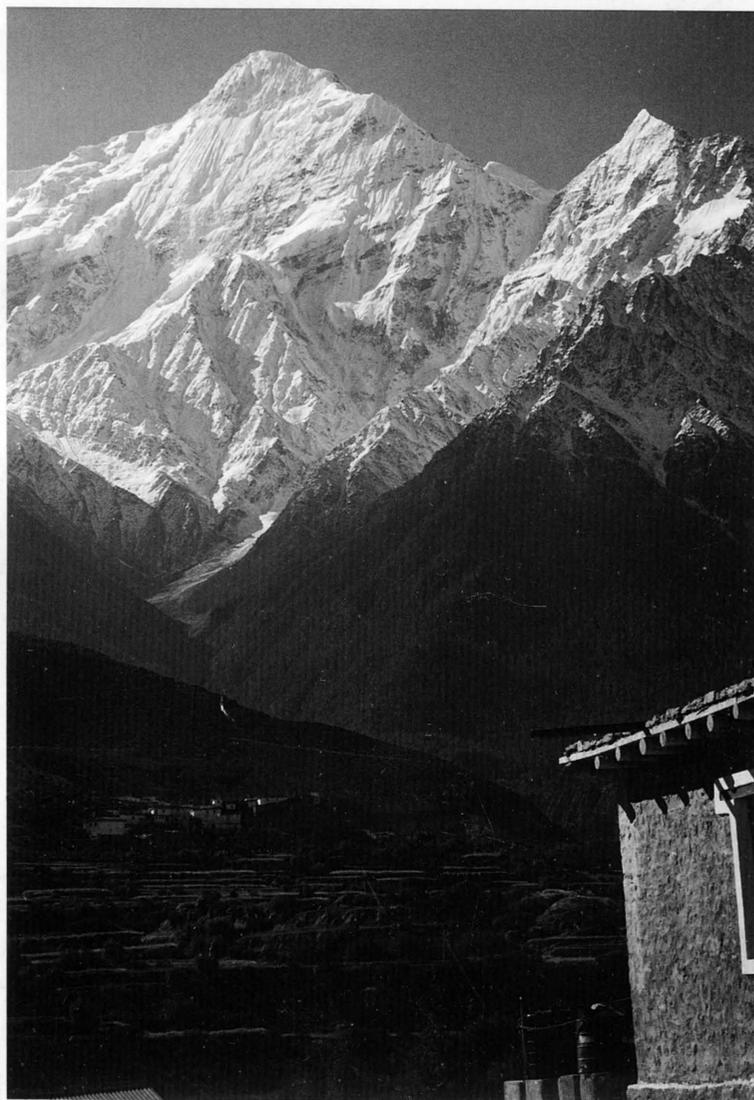
◆ 隊員のトレッキング紀行 ◆

ヒマラヤ 雑感・會田茂雄 … 26
ジョムソン街道トレッキング
雑感・阿部勇作 … 27
馬で行くヒマラヤ・梅津 博 … 28
随想 エクレバティの
化石・菊池俊彦 … 30
ヒマラヤを越える鶴・斎藤哲郎 … 33
世界に誇る山岳観光地
ネパール・菅原富喜 … 34
ジョムソントレッキング
雑感・長岡昭雄 … 36
ヒマラヤ 雑感・長岡伸恭 … 37
カリ・ガンダキと
ムクチナート・長谷川利貞 … 39
一日おくれの
カトマンズ・三浦繁司 … 40
それはナマステから
はじまる・田中洋子 … 41
思わぬアクシデントに
見舞われて・長岡五百子 … 43
アンモナイトを求めて
カリ・ガンダキ河原を歩く
・東 眞理子 … 45
ジョムソン街道トレッキングを
終わって・梅津 博 … 46
支部事業報告
平成8年度の事業概要… 48
平成9年度の事業概要… 49

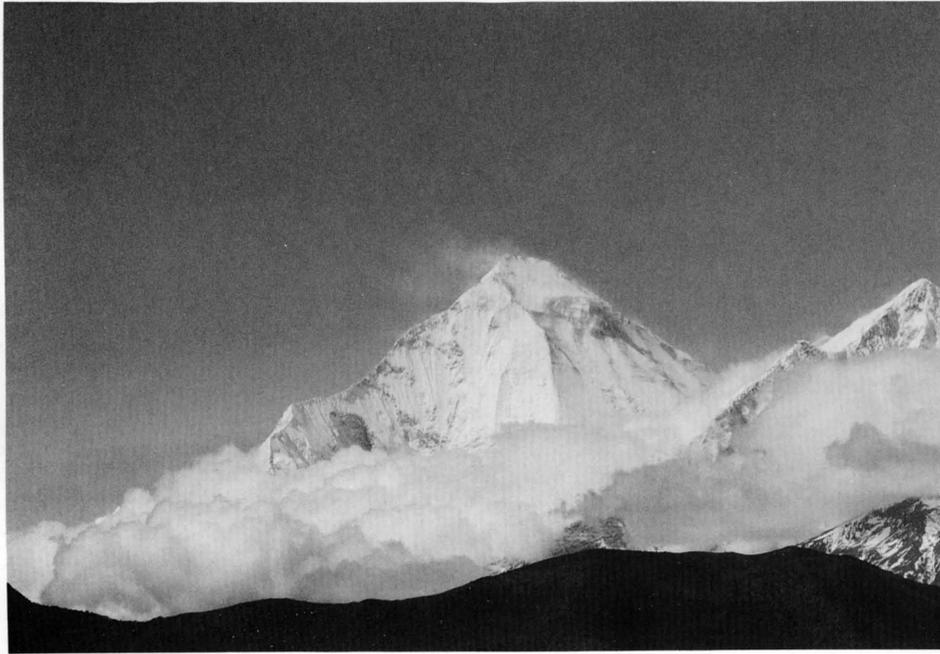
★写真 會田茂雄・三浦繁司・菅原富喜ほか
★挿画 田中洋子

ジョムソン街道トレッキング

報告特集



▲ ジョムソンから望むニルギリ北峰(7,061m) Photo : by S.Aita



◀
ダウラギリ I 峰
(8,167m)

photo :
by T. Hasegawa



▲ ムスタン王国をバックに隊員とシェルパ Photo : by Man Bahadrv Magar

計画実施までの経緯と準備の概要

今回のトレッキングは、ヒマラヤトレッキングのシリーズとしては3回目にあたる。前回のトレッキング中に、ツアーリーダーとは、今回のルートについて、歩きながらあるいはテントの中で、四方山話の中でも語り合われた。その時の話では、前回の経験から航空券の手配をスムーズに行う方法として、早期に参加者氏名を確保しなければならないというのが最大の課題であった。

前回のトレッキングを終り、日本に帰ってから、すぐに今回の計画にはいった。前2回ともお世話になり、会員並みの親交を持つアトラストレックの東真理子さんを頼りにすることとした。計画をたてるにあたって考えたことは、①氷河地帯にはいること。②ある程度、年配者の参加を意識すること。③勤務などの都合で、期間は2週間位が限度だが、その中に連休をいれること。④前回は5月なので、一年前後を経過してなるべく早い無理のない時期に設定すること。⑤前2回の地域を考慮してジョムソン方面を中心にする。などであった。ジョムソン街道となると、鶴の渡りに遭遇する時期に設定したい。ここ2・3年の鶴の渡りの日を調べて見ると、10月の10日から18日までに集中しているようなので、この時期を最有力として考えることとした。

以上の基本的なことを頭に入れながら、東さんと電話やFAXでやり取りをしながら進めたが、忙しい中、こちらの希望を入れてくれたり、カトマンズと何回も連絡してくれたりしながらようやく計画を作ることが出来た。

一番の懸案である早期に参加者氏名を確保することについては、役員会、総会などで会員諸氏の御理解を得て、2月末として計画を進めることが出来た。

以下、今回のトレッキングの計画についての進行状況などを振り返って今後の参考にしたいと思う。

平成8年

5/17 (金) 東京都内 アトラストレック 梅津

会社を訪問、磯野社長と東さんに逢い、前回のお礼と次の計画についての話し合いをする。

5/20 (月) 支部事務局会議 山形市内 大沼ホテル

今後のトレッキング予定についての話し合いをする。

7/6 (土) アンナプルナ・ダウラギリパノラマトレッキング反省会 大井沢 民宿平三郎

次のトレッキングの話が出る。

7/17 (水) 梅津 ⇄ ☎ ⇄ 東

計画をたてるにあたって、ムクチナート、トロンパス、アイスホールの状況等について照会

する。

8/19 (月) 支部事務局会議 山形市内 きらくや

第3回のヒマラヤトレッキングは、ジョムソン街道を取り上げることに決定する。

11/ 8 (金) 梅津 ⇨☎⇨ 東

ジョムソン街道方面の打合せと日程表および費用見積りを依頼する。

11/10 (日) 東 ⇨☎⇨ 梅津

日程表および費用見積りを受領する。

<ダウラギリI峰のアイスホールとジョムソン街道>13日間 ¥345,000

11/11 (月) 梅津 ⇨☎⇨ 東

日程表および費用見積りについて打合せ、参加申し込み締切りを2月末日とする。

11/13 (水) 支部事務局会議 山形市内 東部公民館

原案作成、決定する。

11/15 (金) 東 ⇨☎⇨ 梅津

アトラストレックの旅行申し込み書を受領する。

11/19 (火) 梅津 ⇨☎⇨ 東

計画書の中のアイスホールについては、日程の都合上、歩く距離が長く、一気に高度をあげることに問題があるので、行程からはずすことを検討する。

12/ 4 (水) 梅津 ⇨☎⇨ 東

関西空港発着の場合、前日の宿泊などについて打合せする。

12/ 5 (木) 東 ⇨☎⇨ 梅津

アイスホールをはずした場合の日程について打合せ、日程の再考を依頼する。

梅津 ⇨☎⇨ 長岡

アイスホールをはずした場合の日程について打合せする。

12/ 9 (月) 東 ⇨☎⇨ 梅津

アイスホールをはずし、関西空港発着、日程の再考したものを受領する。

<ジョムソン街道トレッキング>11間 ¥328,000

梅津 ⇨☎⇨ 長岡

受領したものについて検討打合せ。

12/14 (土) 支部役員会・晚餐会 鶴岡市由良温泉 ホテル八乙女

ジョムソン街道トレッキングの概要を発表 募集開始。参加申し込み締切りを2月末日とする。

12/20 (金) 東京都内 アトラストレック 梅津

ジョムソン街道トレッキングの概要を再検討。出発日を10月4日とすることを検討了解する。

12/23 (日) 梅津 ⇨☎⇨ 長岡

アトラストレック東さんを招聘し平成9年2月2日に説明会を開催することについて打ち合わせする。

12/25 (水) 東 ⇨☎⇨ 梅津

平成9年2月2日の説明会を都合により、別の日に変更依頼あり。1月19日とする。

平成9年

- 1/6(月) 説明会打ち合わせ 梅津宅
出席 梅津・長岡 説明会開催通知印刷、1/7(月)発送する。
- 1/7(火) 東 ⇄☎⇄ 梅津
1月19日の説明会内容について打合わせする。
- 1/15(水) 長岡 ⇄☎⇄ 梅津
1月19日の説明会内容について打合わせする。
- 1/16(木) 梅津 ⇄☎⇄ 東
1月19日の説明会内容と東さんの当日の予定について
- 1/18(土) 説明会予備打ち合わせ 尾花沢市 森のホテル
東さんと支部事務局の打合わせ、概要の確認をする。
- 1/19(日) ジョムソン街道トレッキング説明会 山形市内 教育会館
説明者 アトラストレック東真理子さん 参加希望の締切りを2月末とする。16名参加
- 1/20(月) 東 ⇄☎⇄ 梅津 梅津 ⇄☎⇄ 長岡
前日の説明会の内容の確認と今後の予定について打合わせする。
- 2/17(月) 東 ⇄☎⇄ 梅津
説明会以後の状況についてとネパールの準備状況について打合わせする。
- 3/3(日) 参加者取りまとめ 梅津・長岡
参加者名簿を作成 15名の希望があった。
梅津 ⇄☎⇄ 東
参加者名簿をFAXする。航空券と旅行の手配をする。
- 3/6(水) 梅津 ⇄☎⇄ 東
参加申込書、申込金、最終打合わせについて打合わせする。
- 3/7(金) 梅津 ⇄☎⇄ 三浦
参加申込金の振り込みについて打合わせする。
- 3/13(木) ジョムソン街道トレッキング予報第1号発刊
申込金 4月末、国内費用 7月末、旅行費用残金・共同経費 8月末までとする。
- 3/20(木) 支部事務局会議 山形市内 教育会館
ジョムソン街道トレッキングを平成9年度事業とする。
- 4/5(土) 長岡 ⇄☎⇄ 梅津
二人申し込みをしない見込みが確定する。
- 4/10(木) 梅津 ⇄☎⇄ 東
申込書を取りまとめ送付する。13名申し込み。
- 4/14(月) 東 ⇄☎⇄ 梅津
申込書正式受領と今後の予定について打ち合わせする。
- 4/20(日) 支部総会
ジョムソン街道トレッキングを平成9年度事業として確定する。
-

5/14 (木) 梅津 ⇄☎⇄ 東

ネパールの状況などについて打合わせする。

5/16 (金) 東京都内 アトラストレック 梅津

東さんと進行状況について打合わせする。

5/28 (木) 東 ⇄☎⇄ 梅津

現地の状況とサーダー、シェルパを確保したことの報告を受ける。

6/ 1 (日) ジョムソン街道トレッキング予報第2号発刊

旅券、ビザ申請用紙、顔写真、保険申込書等の送付期限を7月25日までとする。

6/ 5 (木) 梅津 ⇄☎⇄ 東

参加者最終説明会を8月23日に設定することで打合わせをする。

6/30 (月) 東 ⇄☎⇄ 梅津

ホテルとテントのルーミングについて打ち合わせする。

参加申込者の内一人キャンセルしたことを告げる。

7/ 1 (火) 東 ⇄☎⇄ 梅津

キャンセル分についての返戻金、参加者の旅行代金等の請求書について打合わせする。

参加申込者各人あて旅行代金等の請求書をアトラスから送付される。

7/25 (金) ジョムソン街道トレッキング予報第3号発刊

参加者最終説明会の案内。トレッキング参加予定者12名となる。

8/13 (木) ジョムソン街道トレッキング予報第4号発刊

参加者最終説明会前夜行事の案内。

8/19 (火) 東 ⇄☎⇄ 梅津

参加者最終説明会について打合わせ。

8/20 (火) 東 ⇄宅配⇄ 梅津

参加者最終説明会用の資料などを受領する。

ジョムソン街道トレッキング計画書作成

12名参加確定。

8/21 (木) 東 ⇄☎⇄ 梅津

参加者最終説明会について打合わせする。東さん体の具合がわるい様子。

長岡 ⇄☎⇄ 梅津

一人、追加参加希望がある由。

8/22 (金) 東 ⇄☎⇄ 梅津

参加者最終説明会の打合わせ。東さん体の調子不良のため欠席とのこと。

一人、参加希望がある由を伝え、今後の対応について協議。

梅津 ⇄☎⇄ 東

取り敢えず氏名住所、生年月日、等をFAXする。

8/23 (土) 参加者最終説明会 銀山温泉 源泉館 11名出席

参加者の最終打合わせ。

一人の追加参加希望者の取扱については参加の方向で全員了解する。

8/25 (月) 梅津 ⇨ ☎ ⇨ 参加者最終説明会欠席者

申込書、最終案内等について伝言する。

梅津 ⇨ ☎ ⇨ 東

追加参加希望者の氏名住所、生年月日等を正式送付する。

旅券、ビザ申請用紙、顔写真、保険申込書等一括取りまとめ送付する。

8/26 (火) 追加参加希望者についての打合わせ 梅津・長岡

申込書、事務連絡などについて打合わせする。

長岡 ⇨ ☎ ⇨ 追加参加希望者

追加参加に要する書類、連絡等を送付する。

東 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

追加参加希望者の航空券手配中の状況連絡を受ける。

8/27 (火) 東 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

追加参加希望者の航空券入手出来た。すぐ4日の宿泊について追加予約する。

梅津 ⇨ ☎ ⇨ 東

ルーミングを送付する。

追加参加希望者 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

追加参加に要する書類、連絡等について問い合わせをうける。4日は宿泊しない由。

梅津 ⇨ ☎ ⇨ 東

追加参加希望者の4日の宿泊取り消しとルーミングの変更を依頼する。

9/ 1 (月) 東 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

参加者最終説明会欠席者の書類受領した旨の連絡受ける。

東 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

追加参加希望者の書類受領した旨の連絡受ける。参加者13名確定する。

梅津 ⇨ ☎ ⇨ 三浦

参加者の旅行代金等について打合わせする。

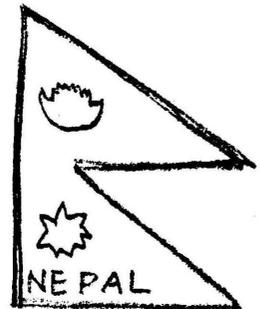
9/ 2 (火) 旅行代金等送金打合わせ 梅津・三浦

参加者分を取りまとめ、アトラスに送金。後日1名キャンセル 参加者12名となる。

10/ 3 (金) 東 ⇨ ☎ ⇨ 梅津

4日の宿泊、5日の関西空港での集合などについて打合わせする。

10/ 4 (土) ジョムソン街道トレッキング 山形空港から出発する。



ジョムソン街道トレッキング計画書の概要

1 期 間 平成9年10月4日(出)～10月15日(休) 12日間

2 参加者

No.	役割 分担	ふりがな 氏名	性別・血統 生年月日	自 宅 住 所 TEL FAX 電話番号	
				勤務先名称 TEL 電話番号 FAX F A X 番号	
1	記録	あい たい しげ お 会 田 茂 雄	男・B 410101	990 山形市東原町 2-4-25 J T ニフコ(株)	TEL FAX 0236-24-0447 TEL 0236-44-5171 FAX 0236-45-5357
2	記録	あ べ ゆう さく 阿 部 勇 作	男・O 290726	998 酒田市栄 5-24 東北総合管財(株)	TEL 0234-22-9578 TEL FAX 0234-24-0607
3	隊長	うめ つ ひろし 梅 津 博	男・AB 310818	990 山形市小白川町 4-17-11 発明協会山形県支部	TEL FAX 0236-32-5827 TEL 0236-44-3628 FAX 0236-44-3303
4	副隊長	さく ち とし ひこ 菊 地 俊 彦	男・A 330604	990 山形市宮町 4-23-27 株式会社富沢学園本部	TEL 0236-41-4236 TEL 0236-45-0135 FAX 0236-45-3897
5	副隊長	さい とう てつ ろう 斎 藤 哲 郎	男・O 340325	990-22山形市大字下東山 1061-1 山形タカセ観光社	TEL 0236-87-3720 TEL 0236-87-3720 FAX 0236-86-3582
6	装 備	すが はら とみ き 菅 原 富 喜	男・A 330216	996 新庄市堀端町 7-83	TEL FAX 0233-23-1611
7	食 糧	なが おか あき お 長 岡 昭 雄	男・A 420319	990 山形市下条町 1-5-12 殖産銀行(株)	TEL FAX 0236-43-4570 TEL 0236-23-8111 FAX 0236-25-8746
8	記録	なが おか のぶ やす 長 岡 伸 恭	男・A 400401	990 山形市下条町 5-8-16	TEL FAX 0236-84-8149
9	記録	は せ がわ とし さだ 長谷川 利 貞	男・O 340223	982 仙台市太白区青山 2-1-32 山形建設(株)	TEL 022-229-6445 TEL 022-266-5208 FAX 022-211-6515
10	事務局	み うら しげ じ 三 浦 繁 司	男・AB 491003	990 山形市下郷 521-1 山光油業(株)	TEL 0236-45-2958 FAX 0236-45-2960 TEL 0236-32-5083 FAX 0236-42-6159
11	救 護	た なか よう こ 田 中 洋 子	女・B 420412	995 村山市楯岡橋 2-24	TEL FAX 0237-53-3260
12	食 糧	なが おか い お こ 長 岡 五百子	女・O 450325	990 山形市下条町 1-5-12	TEL 0236-43-4570
13	ツアー リーダー	あづま まり こ 東 真理子	女・	(株)アトラストレック	TEL 03-3341-0030 FAX 03-3341-9200

3 出 発

10月4日(出)

17:00 集 合 山形空港 日本エアカウンター前

18:55 山形空港発 日本エア 588便M90

20:30 関西空港着 日本エア 588便M90

4 日 程

月 日	行 程	時 間	交通機関	摘 要
10月5日(日)	関西空港発 カトマンズ着	12:40 18:45	RA-412	空路、カトマンズへ、 ホテル泊
10月6日(月)	カトマンズ発 ポカラ着		航空機	午前、国内線でポカラへ。 ホテル泊
10月7日(火)	ポカラ発 ジョムソン着 ジョムソン発 マルファ着	午前 午後	航空機 トレック	空路、ニルギリ北峰を間近に仰ぐジョムソンへ、シェルパと合流。河口慧海が滞在した白壁の続くマルファへ。 マルファ/2,670m泊
10月8日(水)	マルファ発 カクベニ着	午前 午後	トレック	ムスタン王国の入口の村カクベニへ。アンモナイトの特産地として有名。 カクベニ/2,804m泊
10月9日(木)	カクベニ発 ジャルコット着	午前 夕刻	トレック	山腹を登って台地に上がり、ゆるやかな登りとなりトロンパスを望める。 ジャルコット/3,600m泊
10月10日(金)	ジャルコット発 ムクチナート着 ムクチナート発 ジャルコット着	午前 午前 午前 午後	トレック	チベット仏教とヒンドゥ教の聖地ムクチナートへ、ダウラギリ山群が望見される。見学後ジャルコットへ。 ジャルコット/3,600m泊
10月11日(土)	ジャルコット発 エクレバッテ着	午前 午後	トレック	カリ・ガンダキ左岸の道をエクレバッテ(一軒茶屋)へ。 エクレバッテ/2,720m泊
10月12日(日)	エクレバッテ発 ジョムソン着	午前 午後	トレック	ニルギリ北峰(7,061m)ティリツォピーク(7,134m)ダウラギリI峰(8,167m)ツクチェピーク(6,920m)が望まれる。 ジョムソン/2,713m泊
10月13日(月)	ジョムソン発 ポカラ着 ポカラ発 カトマンズ着	午前 午後	航空機 航空機	ポカラで乗換えカトマンズへ、 ホテル泊
10月14日(火)	カトマンズ滞在			自由行動。夕食後空港へ。
10月15日(水)	カトマンズ発 関西空港着	00:05 11:20		帰国。

ポカラでの利用ホテル BASE CAMP RESORT(ベース キャンプ リゾート)

カトマンズでの利用ホテル SHERPA HOTEL (シェルパ ホテル)

5 経 費 (個人負担額)

旅行費用	¥328,000	会費	¥45,380
査証代	¥2,500	(山形空港・関西空港間航空運賃、10月4日の宿泊費、共同装備、共同薬品、共同食糧費、その他)	
査証取得代行料	¥4,120	計	¥380,000

6 帰着

10月15日(火)

17:00 関西空港発 日本エア 589便M90

18:20 山形空港着 日本エア 588便M90

18:50 解散 山形空港 到着ロビー

7 実施本部 〒998 酒田市東泉町三丁目2-15 金森 繁三郎 TEL/FAX 0234-23-3859

8 留守本部 〒990 山形市和合町二丁目3-7 真田 匡三 TEL/FAX 0236-41-4736

9 連絡先

ポカラでの利用ホテル BASE CAMP RESORT (ベイス キャンプ リゾート)

Lake Side, Pokhara, Nepal TEL (61)21226

カトマンズでの利用ホテル SHERPA HOTEL (シェルパ ホテル)

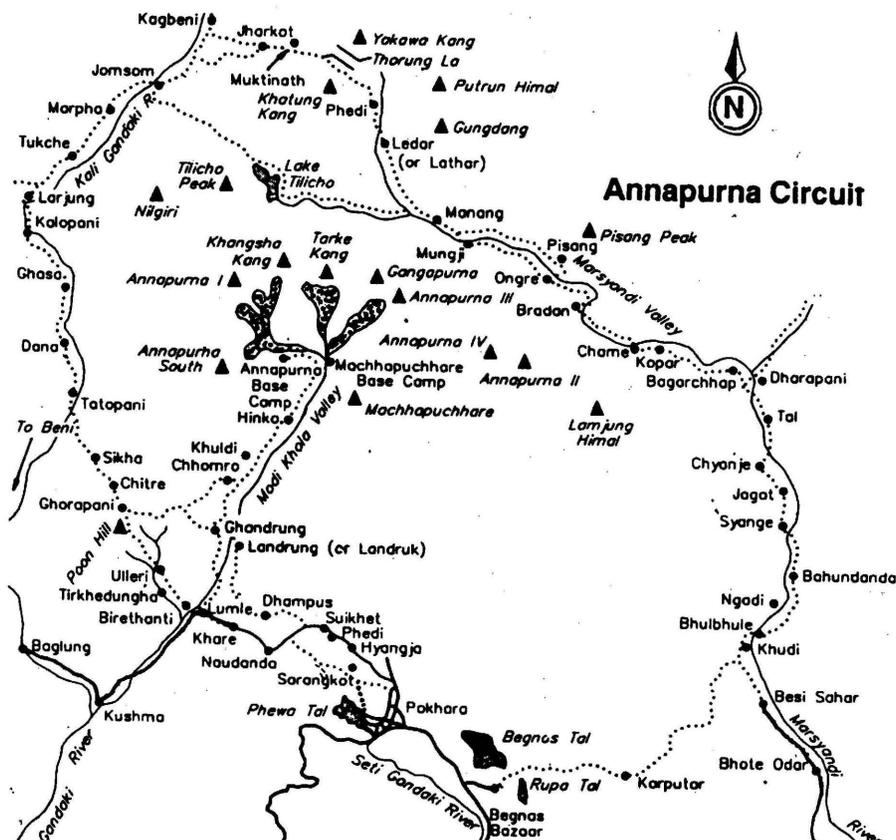
Durbar Marg, p. o. Box 140, Kathmandu, Nepal TEL 2-27000

現地連絡先 HIMALAYAN JOURNEYS(P)LTD (ヒマラヤン ジャーニーズ) 担当 大河原

P. O. Box 989 Kantipath, Kathmandu, Nepal TEL 2-26138, 26139 FAX 2-27068

夜間緊急時連絡先 TEL 4-13048 (大河原 汎二・由紀子)

緊急連絡先 〒160 東京都新宿区三栄町23 (株)アトラステック TEL 03-3341-0030 FAX 03-3341-9200



行 動 記 録

10月4日 (出)

會 田 茂 雄

山形空港 ～ 関西空港 ～ 泉佐野

17:00 山形空港集合
18:55 山形空港出発
20:30 関西空港到着
21:55 泉佐野 シティホテル プリン스에チェックイン

ジョムソン街道トレッキング隊員(阿部隊員は直接関空へ)山形空港へ集結。

隊員家族大勢の見送りを受け、JAS(日本エアシステム)588便にて、薄暗くなった山形空港を一路関空へ。

機内では飲み物のサービスを受け、飛行機は日本海より松山、徳島上空を経て淡路島東岸より関空へ着陸。

空港3階レストラン「とんかつKYK」にて、今回の遠征の前途を祝し隊長の音頭で乾杯、夕食をした後、ホテルへチェックイン明日からの夢を。

10月5日 (回)

阿 部 勇 作

泉佐野 ～ 関西空港 ～ 日根野

関西空港で山形勢と合流するため、10月4日第2日本海号で酒田駅を21時13分発で出発する。翌10月5日、大阪駅に到着後、関空専用ホームから出発して、関西空港に8時35分に到着した。

久しぶりに来た関空は、日曜日とあって混雑していた。山形勢は、前泊しているので11時にならなければ現れないだろうと思い、荷物を適当な場所に置いて正面玄関付近を歩いていたところ、梅

津さんに声をかけられ、「こんなに早く来たのですか」と問いかけると、実は、本日私達が乗るはずの飛行機が、まだカトマンズをフライトしていないことを知らされる。ビックリするやらとまどうやらであったが、隊員の集まっている場所に行き皆さんと合流する。今後の事については、ツアーリーダーが来てから対策を立てることになるらしい。その後、ツアーリーダーの東さんの説明によれば、本日は、大阪泊りとなり明日を待つより方法はないという。とりあえず荷物を一時預かり所に預け、昼食後に、航空会社の指定する近くの日根野ホテルに宿泊すべくバスで移動する。

日根野は、関空ができてから発展してきた街らしく、農村の面影を至るところに残しながらも新しい道路や建物ができており、また、JR日根野駅から4キロメートル関空寄りには、りんくうタウン駅がりんくうビル内にあり、このビルを中心にして、レジャーランドが完備され、日曜日とあって、利用客は非常に多いようである。

ホテルに帰っても、ロイヤルネパール航空からの情報は、全く私達には届かず、不安はかくしきれない。成り行きを見守る外に方法はなく、夕食後は雑談を交わしてやり場のない心境を押さえ、早めに休むことにする。

10月6日 (月)

長岡 五百子

日根野 ～ 関西空港 ～ カトマンズ ～ ポカラ

14番ゲートに行くため無人のウィングシャトルに乗り込む。13時38分、やっと大空に飛び立った。まもなく飲み物のワゴン車が来て、水割りビールを頂く。昨日からお酒に縁がある様だ。機内食は、14時を過ぎていたのでとてもおいしい。量も手頃で大満足。雲が下から盛り上がる様に次々とひろがる。窓から見える景色は退屈しない。上海に給油のため到着の放送がはいる。中国にも足を着けるなんて思ってもみなかった。1時間の時差を調整して、15時31分、また機内の人になる。これから6時間は結構ながい。目をつむっても眠れない。隣の席ではトランプをしている。まもなく夕食が配られた。子羊の煮込んだものが、柔らかくおいしかった。

ポツンポツンと明かりが見えて、まもなくカトマンズに到着。滑走路に到着したと同時に後ろから拍手と歓声が沸き起こった。目的地に着いた安堵の表現なのだろう。私には初めてのネパール、胸がわくわくする思いで入国手続きを、ところが時間のかかることこの上ない。日本人団体はすっかり順番を取られ、並んでいる人がどんどん遅くなる。少々不愉快な気持ちで飛行場をでる。

夜なのに沢山の人が集まっている。子供達が荷物に群がりマネー、マネーと手を出して近づく。出迎えてくれたポーターや運転手は、すさまじいけんまくで子供たちをおいはらっている。バスの上に荷物を積み上げ、21時、ポカラに向けて出発した。

目をこらして外の様子を見ると、人と動物が雑然と入り混じっての生活なのだろう、臭気がただよい息をのむ思いだ。ポカラ迄7時間、仮眠を取るように言われたが道が悪くて眠れない。ドライブインらしいところでトイレタイムだ。暗くて怖い感じ、戸が閉まらない、お互いに押さえながら

済ませる。22時迄カトマンズを出ないと通行止になるとの事。山越えの途中何度も関所があり、料金を払って通してもら。現地の大きな収入源なのだろう。窓が開かなく車内は暑い。足がのばせず体が痛く感じる。3時30分つらい状態からやっと解放されホテルに到着。荷物整理を済ませ、シャワーを浴びて、5時30分、南国らしい雰囲気のレストランへ行く。温かい紅茶は格別においしい。おぼえたてのミートチャウがでる。食事を済ませ外に出ると、真っ白なヒマラヤの山々が遠くに見える。6時バスに乗りポカラの飛行場へ、人影は少ない。空気が澄みきってツンとする雰囲気だ。地元の人は長い布をまきつけて寒さを避けている。厳しい荷物と身体検査を終えてジョムソン行きの飛行機に乗り込む。機内は私たちの貸し切りだ。小型機なので不安はあったがぜんぜん大丈夫。山の頂上まで続いている千枚田、大きな山に囲まれて川が何本もある。湖も大小様々、見事な景色で皆窓にかじりついている。まもなく耳せん用の綿と飴が配られた。取り合わせがおもしろい。35分でジョムソンへ到着、ここも朝早いのに沢山の見物人が出迎えてくれた。



▲ ジョムソン村入口道路端の特産リンゴ売りの女達 Photo : by T. Sgahara

10月7日 火

菊地俊彦

ポカラ ～ ジョムソン ～ マルファ

ベースキャンプリゾート (Base Camp Resort : Lake Side, Pokhara, Nepal, P. O. Box No82.) の夜明

けは真っ赤な朝焼けに始まった。

5時30分

停電に備え蠟燭を配置する食堂で、「カクベニ、ジャルコットから上は危険なのでアルコールは駄目ですよ」と東さんよりの注意を聞きながら、ジャガイモ、豚ベーコン、玉葱スライス、焼トマト、バター、ママレード、苺ジャム、食パン、コーヒー、紅茶で朝食。

6時10分

トラックに不要なものをカトマンズに送るため、まとめて梱包し、ドアの前に出す。6時15分ポカラ空港にむけ発。

6時40分

空港着

7時00分

山岳専用機スイス製ツインオッターは機首をジョムソンに、茜色の朝焼けに向かって飛び立つ。モディコーラをひと跨ぎ、脚下に昨年訪れたゴラパニ、プーンヒルが見える。標高 5,000m ぐらいまで灰色の雲が垂れ込め、名峰マチャプチャレ、アンナプルナⅢ峰は見えない。タトパニを真下に、飛行機はカリ・ガンダキ河を一気に北上する。間もなく岩山と砂と円礫で構成された川底の滑走路にガタガタンと着陸。

7時25分

殺風景なジョムソン空港着（標高 2,713m）

7時35分

Hotel Himarayan Inn(German Bakery)着。紅茶を喫す。

8時30分

マルファに向かって出発。ジョムソンの南にニルギリN峰（7,061m）、右手にほんのちょっぴりニルギリC峰（6,940m）が見える。石造りの家は豊富な灰色石灰岩を利用している。空港前はマルファ特産リンゴの露天商が並んでいた。マン・バハドール・マガールと言うサーダーは「シェルパたちはポカラを9月21日に出発したのだ」という。柔らかい緑のヤナギ並木が小川に沿って並ぶシアン村は、200人ほどの住民、マルファと同じようにリンゴを栽培し、リンゴ酒や干リンゴを作り、ポーターや労働者、馬方を兼務して生活するタカリ族とのことである。

10時10分

マルファ・レストラン着

11時00分

昼食 蜂蜜サンドイッチ（パンと焼トマト）、キャベツ、大根、人参のなます、茹でたジャガイモ、サラミ、バナナ、ウリ、紅茶

12時00分

ヒンドゥー教とチベット仏教が同化しているマルファの寺院参拝。正面に阿弥陀如来、右にパドマサンババを祭っていた。寺院屋上から見たマルファ村の展望は、統一された白壁が美しく素晴らしいが、ニルギリN峰、ダウラギリ共に雲の中。

夕方の弱い日差しが、周囲に広がる収穫間近い紅花ソバ畑に、差しかかるころ驟雨が来た。し

かし、あっという間に晴れ上がり、降るような星空に覆われた。

18時00分～21時30分

夕食後、食堂を出てテントに帰る途中、長岡五百子隊員が転倒し、右足首を痛める。梅津隊長を中心に、救急医療に心得のある方々が応急手当を施す。大事をとり、明朝一番機でポカラに移送、手当を施すことになった。

24時00分

就 寝

10月8日 (木)

斎藤哲郎

マルファ ～ ジョムソン ～ エクレバッテ ～ カクベニ

5:30 起床 気温 8℃

7:07 マルファ村出発

12:05 エクレバッテ着

14:15 カクベニ村着

天候 快晴

変更、変更で狂った日程は、今日からは予定通りのスタートとなる。早朝大変な事件を聞かされた。メンバーの長岡五百子さんが、昨夜、足の捻挫で大事をとって、今朝長岡昭雄さんとカトマンズへ戻ったとのこと。あの様に楽しみにしていた二人の無念さを思うと胸が痛む。7時7分、抜けるような青空に白く輝くニルギリ峰を眺めながら、マルファ村を出発。歩き難い河原の中をジョムソンへ戻る、途中長岡夫妻が搭乗していると見られる小形飛行機に全員が大きく手を振って見送る。

8時45分ジョムソンへ到着、飛行場の後方にニルギリ峰が迫って見える。7,000m峰は、見上げる首が痛くなるほど遥かに高い。

チェックポストで各自サインを終え、9時20分本格的に歩きだす。ヒマラヤに囲まれた広大な河原にあるジョムソン村は、空港より1キロメートル程先にあり、途中、軍隊の駐屯地等がみられた村を抜けると、道は河原の中の踏跡を黙々とあるく。村も道も、とにかく埃っぽく、牛ふんまみれで澄みきった青空に輝く峰々とは対照的だ。

本日の昼食の予定地のエクレバッテまで、2度休憩を取りながら12時5分到着。数百メートルの河幅を有する広大なカリ・ガンダキ河原は、下流より吹き付ける南風が強く、時折突風のため砂塵が舞い上がり、河原でアンモナイトの化石を探す人達の姿が暫し視界から消える。

カクベニ村は、ネパールと言うよりむしろチベット風の村、各家の戸口にヤギの角が飾られているのが目に付く。何百年も前の寺院が強風のため崩れかけて残っている。ここカクベニはムスタン

王国との国境にあたり、村の外れの高台に、ストップの看板と警備隊の建物があるだけが、高台から眺めるムスタン方面は、人影もなく荒涼として、乾燥のために緑のない山並みが続き、黄泉路を思わせる涯の涯の淋しい処だった。

朝食メニュー お粥、トースト、ゆで卵、なら漬、梅干し、タクワン漬け、ノリの佃煮、リンゴ、
ミルク、日本茶、紅茶

昼食メニュー トースト、チーズ、魚缶詰、キャベツと人参のサラダ、焼きトマト、リンゴ

夕食メニュー ダルバード、麺とミートソース、卵スープ、地鶏とキャベツの煮物、鶏から揚げ、
オクラの塩煮、ビール、紅茶、ミルク、日本茶

10月9日 (休)

菅原 富喜

カクベニ ～ ジャルコット

いよいよ今日からトレックの核心部に入る。皆さん興奮している、満天の星空のもと目が覚める。前日、東ツアーリーダーから日程の説明あり、すべてはその予定通り進められた。天候は晴れ、気分爽快である。

山荘の食卓から歪んだガラス越しにニルギリ（7,061m）峰がとても美しい。朝食後のわずかな時間、隊員は思い思いの撮影に忙しい。6,000mを越す山の頂稜は、すっかり冬景色である。山荘の前もかなり寒い。はるかなる母国、日本からのニュース「札幌市に初雪あり」との情報にざわめく。

7時30分出発。今日の日程は難コース、約800m余りの高度差、3,600mのジャルコットを目差す。山腹を縫うかのように一気に登高、台地状に登りつめる。背後にはダウラギリ（8,167m）の先端が見える。やがてトロンパス（5,416m）の景観が美しい。振り返ると茶褐色の大地に棚田、その向こうに、昔をしのぶムスタン王国の山並みがみえる。このあたりがトレックのクライマックス、とても美しい。私、シャッターに夢中。

空気が薄い、注意！一歩立ち止まるとたちまち遅れる。取り返すのに大変疲れる。カメラに夢中で気がついたら、高度障害でしょうか、かなり苦しい。3,600mのジャルコットに着く。頭痛、急性喘息、だるい、高山病に悩む。私はテントに休憩、体を休める。

午後3時ティータイム、田中洋子さんの野だてあり、抹茶、和菓子に隊員の心和む。

夕刻に至り、高度障害に悩む隊員多し、取り敢えず2名を馬で下降決定。エクレバツテ2,720mに降ろし回復を待つ。実に12名の隊員中、欠員4名、8名での淋しい夕食となる。残念、明日に期待。就床。

10月10日 (金)

長岡伸恭

ジャルコット ～ ムクチナート ～ ジャルコット

(晴)

目の褪めるような青空のもと、今日は、今回のトレックのハイライトとも言える聖地ムクチナートへ向かう。ゆっくりした、アッ！そうです『スロービデオの世界』の歩行で、徐々に高度を上げる。菅原隊員はロバをチャーターした。ウマく乗り手の言うことを聞かずポーターの手を借りる。今度はウマくいった様だ。

年一回のお祭りとあって、着飾った老若男女、と言っても若い巡礼者は殆ど居ないが、此処街道の往来は人々で賑わっていた。

高度を上げるに従い、アンナプルナ主峰群が次第に美しい容姿を心いくまで見せてくれる。ラニポワの部落に入ると一層の華やかさと賑わいをみせ、巡礼者やトレッカーを当て込んだ民芸品の土産を売る店が、街道に出店を出し声を掛ける。

入山のチェック（関所）。ビデオ持込み有料とあって慌ててカメラに『ヘンシーン』する。ヒンドゥー教、ヒマラヤ仏教の聖地に入る。菩提樹の木漏れ日の中、威厳を正し、巡礼者に混じり、精霊を有り難く額に、その朱印を受ける。

ヒンドゥー教寺院の前は大勢の参拜者で賑わい、石畳の水が解けない気温の下でインド系の何人もの信者が寺院前の大きな水槽に飛び込んで身を清め、異なる動物の彫刻作りの口より出ずる幾条かの聖なる水を浴び礼拝する。それを幾度となく繰り返すのである。何人かのシェルパも礼拝し、ペットボトルに聖なる水を汲み、土産に持ち帰った様である。ヒマラヤ仏教の寺院は以外にひっそりとし礼拝者も少ない。ヒンドゥー教に比し絶対的に信者、礼拝者が少ないのは明白であった。

礼拝を終え、身も心も生まれ変わった我々一行は、額の朱印に胸を張り、足取りも軽く下山を開始する。高度に於ける下山はこんな素晴らしいものか。各々口には出さないが、快楽感を味わい、余韻に酔っているかの様である。此処で騎馬隊の梅津隊長、菊地副隊長の出会いとなる。元気な様子に額に朱印隊安堵する。

今度はアンナプルナ山群を眺めながらの下山、贅沢この上ない。周りや足元は秋を感じさせる色合いに比し、空の色、雪をいただくヒマラヤ山群は初夏の趣だ。程なく菩提樹に囲まれたジャルコットに到着。

昼食後は、昼寝をしたり、近郊を散策したり、ティタイムまで夫れ夫れにフリータイム。

ティタイムには、蒸したジャガ芋に懐かしさも手伝い舌鼓をうち数個を食べる。程なく梅津、菊地隊員到着。テーブルを共にするのも一時、夕食前に梅津隊長と菊地隊員に入れ替わり菅原隊員が体調不調の為、この2名ロバにて、約600m下方のカクベニ迄下山、高度障害を和らげる対策を講じる。

アルコール禁止の為か、夕食後早々に就寝。相変わらず犬の泣き声が煩く眠れず。

起床 7:00 朝食 7:30 出発 8:00

MENU

B.F. おかゆ、トースト、チーズ（長谷川会員差入）

LUN. ラーメン、

T.Time ボイルドポテト、Coffee、紅茶、Milk



▲ ジャルコットでのシェルパたち Photo : by S. Miura

10月11日 (土)

田中洋子

ジャルコット ～ エクレバッテ

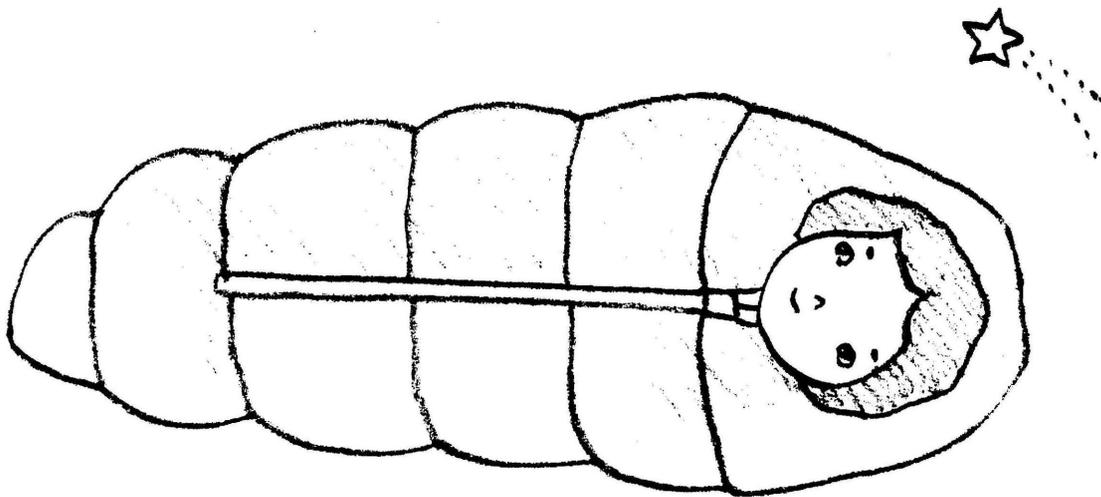
今朝もよい天気です晴らしい青空を見ることができた。朝食前にアンモナイトを見にでかけた。10分位行った村外れの沢にでっかいアンモナイトが、ドーンと2つ並んでいてびっくりしてしまっただ。1個の大きさは直径2メートルもあり、どんなに頑張っても背負って来る事ができなかった。近くにも小さいアンモナイトが沢山あったが、泥でよごれているし、皆な1個ぐらいずつ拾っただけだった。

エクレバッテまでの行程は、あまり厳しい道でもなかった。私はいつもサーダーのマンとシェル

パのダワ(N0.2)と一緒に、ラストを歩いていた。マンとダワと私は、交替で沢山の歌を歌った。簡単な日本の歌を3人で歌ったりして、楽しくトレックすることができた。この広いジョムソン街道の空に、歌声が風に乗って消えて行った。ゆっくり、ゆっくりと時が流れて行く。この大自然の中に身を任せていると、いい汗と、いい仲間に恵まれて、『来てよかったなあ』と心から思った。途中風が強く、砂荒しが続いて、エクレバツテに着いた時は全身砂で真っ白だった。

昼食後はバツテの前の河原で、皆アンモナイト拾いに一生懸命だった。私は河原の近くでスケッチして遊んでいると、ダワ(N0.1)がアンモナイトを沢山拾って来てくれたので感激した。チップを沢山あげたのだろうと言われたけれど、私の場合は、ハートで解決したと自分では思っている。

夜になって、スタッフたちが食事しているテーブルで、東さんといろいろおしゃべりして、時間のたつのも忘れる位、たのしい一時だった。スタッフが東さんにだけ食事をもって来た。夕食は済んでいるのだが、なぜかもう一度出て来るのだ。(今度のはスタッフと同じものでご飯にカレーのようなもの一皿) 東さんの食べるのを惚れ惚れしながら眺めていたら、私にはスプーンだけ出て来た。つまりふたりで食べろということだった。強風が夜遅くまで吹き、テントに入ってから、なかなか眠れない。何も無理して寝ることもないと思い、しばらくは満天の星空をあきもせず、いつまでも、いつまでも眺めていた。



10月12日 (日)

長谷川 利 貞

エクレバツテ ~ ジョムソン

(快晴)

8:00 エクレバツテ
8:30 パンダコーラ出会 (10分休憩)
9:10 カリガンダキ河原入口 (10分休憩)
10:15 ジョムソン

起床 6:30

モーニングティー 7:00

朝食 7:20 (エクレバツテ)

メニュー オジャ、チャパティー、卵焼き、ソーセージ、パン

昼食 12:00 (ジョムソン)

メニュー ネパールラーメン、卵とじ (トマト入り) ソーセージ、チベタンブレッド、サーモン (かんずめ)、サラダ、キャベツおひたし、デザート (パイナップルカンズメ)

夕食 18:00 (ジョムソン)

メニュー 野菜春巻き、キャベツおひたし、サーモン (カンズメ)、ピーマンの炒め物、サラダ (キャベツ、人参、トマト)、フライドチキン、ビーンズ、ライス、味噌汁 (ワカメ、玉フ)、デザート (パウンドケーキ)

今日は、今回のヒマラヤトレッキング最終日で、全員張り切ってエクレバツテを出発。カリ・ガンダキの巾1キロメートル以上の河原の道を、ジョムソンに向かって下って行く。真正面には、ニルギリ北峰 (7,061m) を見ながら歩き、張り出した尾根の末端を乗り越すと、まもなくパンダコーラの出合いに着き小休止。パンダコーラの木橋を渡り左岸の河原を歩く、一度河原から一段上の道に入るが直ぐ河原に戻り、右手にツクチェピーク (6,920m) 及びダウラギリ峰 (8,167m) を仰ぎ見ながら、カリ・ガンダキの広い河原を歩く。正面には、ニルギリ北峰が白く、ヒマラヤ巒がクッキリと美しい姿を見せている。

ジョムソンの本村の手前で、ポカラからの飛行機が着陸したのが見える。ジョムソン本村を通過し、カリ・ガンダキを吊り橋で渡り、アーミィキャンプを過ぎ、ホテル・ヒマラヤン・インに全員無事到着し、トレッキング終了。

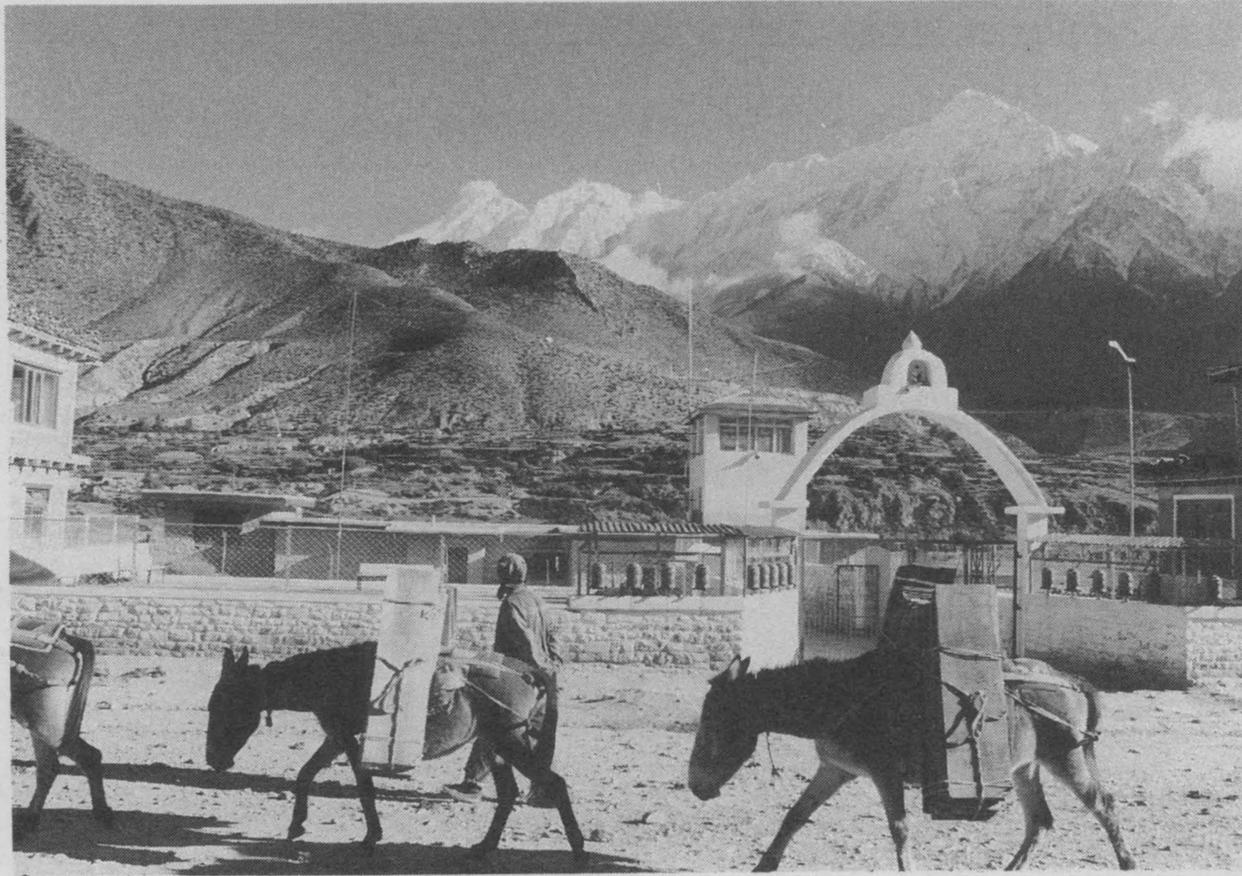
昼食後は、各自それぞれパッキングなどを行い、またジョムソンの村を散策、ショッピング等を楽しむ。

夕食後は今回のトレッキングのスタッフ一同とサヨナラパーティー。アミダクジ、シェルパダンス等で大いに盛り上がる。

10月13日 (例)

阿部勇作

ジョムソン ～ ポカラ ～ カトマンズ



♠ ジョムソン空港 Photo : by T. Sgahara

昨日は夕食後、シェルパ、キッチンスタッフの労をねぎらいお別れ会を楽しくやり、今朝はうす暗いうちに朝食を済まして、出発準備をする。はりつめていた毎日の行動もなく、ポカラへのフライトを待つのみである。

早朝のニルギリ峰は、雲ひとつない晴天の空に、クッキリと姿を現し、ひんやりとした朝の空気がさわやかである。出発準備を終えて、ホテル前で日の出を待つことにする。やがてニルギリ頂上付近に朝の光が差し込み、真っ白な雪肌はピンク色に染まりその美しさは計り知れない。

飛行場に行き、一番機の到着するのを待つ。快調なエンジン音を響かせながら一番機、二番機が到着後、私たち一行は、二番機に搭乗してポカラを目指すことになった。窓越しに見るアンナプルナ山群に感動し、また、眼下に見える山肌に広がる千枚田を思い起こさせる耕地の美しさに見とれているうちに、機はポカラに到着した。カトマンズ行きを待つ間、空港周辺を散策する。空港付近から見えたマチャプチャレ峰、アンナプルナ峰は、指呼の中にその山容を見ることができ、初めて見た時の感動を思いおこさせた。

ポカラからカトマンズ行きのフライトする頃には、山岳方面にガスが湧き、窓越しにその姿は部分的に見えただけであった。だが、眼下に見えるポカラの町並みや、山岳高地に広がる耕地の美しさはすばらしかった。

カトマンズの空港に到着後、ただちにホテルに直行、荷物をまとめて近くの中国料理店で昼食にする。カトマンズに到着した安堵感と食事の美味しさが重なり、自然と顔がほころぶのをかんじる。食事後は自由時間。久しぶりにシャワーで汗を流し、夕食時間までゆっくりとくつろぐ。

夕食は、インド料理に舌づつみを打つ。広い店内の正面にはインドの音楽を奏でる奏者が2名い

て、静かなメロディーの響のうちにも客を落ち着かせる雰囲気があった。

また、夕食を開始する前に、去る10月7日、マルファで不慮の災難にあい、トレッキングを中止して、帰国された長岡五百子さんのその後の経過について、ツァリーダー並びに隊長から報告がなされ、また、長岡伸恭さんより謝辞が述べられた。

楽しい夕食を終わってから、全員ホテルに帰り着く。

出発準備	7:00	
ジョムソン発	7:50	
ポカラ着・発	8:10	11:35
カトマンズ着・発	12:10	12:20
ホテル着	12:45	
食 事	13:20	13:45
ホテル入室	14:10	
夕 食	19:00	20:50

10月14日 (火)

会 田 茂 雄

カトマンズ (フリータイム) ～ トリブヴァン空港

今日は終日フリータイム

早朝エベレストマウンテンフライトへ、菅原、田中両隊員。

朝食はバイキングで各自。

アッサンバザールへ東ツァリーダーより紅茶購入の為案内してもらう。その後、ヤトマチェードのお寺見学へ、帰りはタクシーで (車はトヨタスターレット) ホテルへ、料金は380ルピー (乗車時間5分位か)。

昼食は日本料理「榎」へ、幕の内弁当で重箱に入っており、内容は、サバの照り焼き、レタス、コロッケ、えびフライ、たまご厚焼き、肉ダンゴ、キンピラごぼう、ピーマン・トリ肉の煮物、キュウリ・ダイコンの酢の物、トーフとワカメのみそ汁

バックミュージックは宗次郎の曲だった。

店員の服装は、黒ズボン、小豆色のチョッキ、ワイシャツに蝶ネクタイ、茶色のポーシ。

店内には4枚の色紙がありその一枚に みかぐらのまひの

いとまをたち

いでてもみじに

わかみやのころ

神へささげの舞に

ちょっと抜け出して
若都の子供たち

夕食のレストランは、ラム・ドワードル（グローバルな料理）。場所はターメル、世界的な登山家が必ず飲み立ち寄りと言われているところ。今日のメニュー、酒のつまみを中心に注文しておいてくれたとか。二階に案内されたが、階段には二本のザイルが手摺りの代わりに張ってある。カウンター内には、エベレストのサミッターのサインの類を中心に、両脇には、著名な登山家のサインがズラリ、中にはジミー・カーターや橋本龍太郎と色々あった。飲み物は生ビール、ロキシー（手作り）足の形した紙のコースターの上へ。

料理は魚のフライ、チーズ、キュウリ、にんじん、大根等。スプタ風で中身はトリ肉、人参、ピーマン、タマネギ、トマト、チーズボール、パン（木の香がした）ホットスープ（モンゴル風）中にはソウメン、トリ肉、人参、ピーマン、チーズ、ナンパン、チャーハンにはピーマン、ニンジン入り、最後にジャスミンティー。

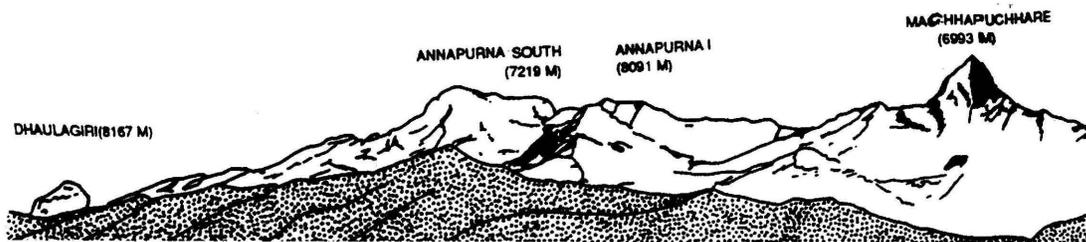
ホテルに戻りトリブヴァン国際空港へ、荷物検査130kgオーバーとか、しかし、100kgはサービスでまけてもらうが、30kgオーバー分で300ドル何がしとられる、全くひどい事。

10月15日（水）

会田茂雄

カトマンズ（トリブヴァン空港）～ 関西空港 ～ 山形空港（解散）

- 0:25 RA-11にてカトマンズに別れを告げ、空路日本へ。離陸して間もなく食事が運ばれてくる。
- 4:30 モーニングティー
- 5:00 上海にて給油の為立ち寄る。
- 6:20 上海発
- 8:15 関空へ無事到着（日本時間11:30）
阿部さんは、ここよりJRの為、再開を約束し解散。
- 17:00 JAS-589便にて京都、日本海上空を経て家族の待つ山形空港へ。
- 18:20 久々に山形の空気を吸う。成功おめでとうの横断幕にむかえられる。



決算書

三 浦 繁 司

収入の部			支出の部			(単位：円)
項 目	金 額	摘 要	項 目	金 額	摘 要	
旅行費用	4,560,000	申込金、国内費用、旅費 ③380,000×12名	旅行費用	4,016,400	アトラストレック支払い ③334,000×12名	
共同費用	122,600	⑩10,000×11名 ⑪12,000×1名(阿部氏)	国内旅行費用	430,340	国内航空運賃・電車賃	
返戻金	83,880	カセ観光(国内分) 44,880 アトラストレック(カトマンズ宿泊分) ③3,250×12名=39,000	空港使用料	31,800		
ルピー残金	9,891		関空ホテル代	84,840		
雑収入	20,097	隊長寸志 15,000 真田氏謝儀 5,000 打合せ残金 97	食料費	68,411	トレック食料品 国内食事代	
			ルピー両替	70,000		
			薬品代	4,167		
			雑費	29,210	荷物預かり 振込手数料	
			手荷物代	39,000	カトマンズ重量オーバー分	
			返金	22,300	東海林 ¥7,300 長岡 ¥15,000	
計	4,796,468		計	4,796,468		

(収入金額 4,796,468円) - (支出金額 4,796,468円) = 0 (残金なし)

ネパール国内収支決算

収入の部			支出の部			(単位：ルピー)
項 目	金 額	摘 要	項 目	金 額	摘 要	
両替	31,200	日本円 70,000 円両替	拝観料	1,020	カクベニ 1,000 ムクチナート 20	
			食料費	7,923	ビール代ほか	
			出国税	7,000	700 ×10名	
			雑費	10,841	読書 電話代ほか	
計	31,200		計	26,784		

(両替金額 31,200ルピー) - (支払金額 26,784ルピー) = 4,416 ルピー

(4,416 ルピー) × (2.24円) = 9,891 円 (トレッキング決算書収入の部に戻入)

ヒマラヤ雑感

會 田 茂 雄

ヒンドゥ教の聖地ムクチナートは、今が祭り
とのことで老若男女が数日間をかけて歩いてく
る。

その中には、人の背中に背負われてくる人、
馬に乗ってくる人など様々で信仰の深さに驚か
される。

今回同行したシェルパ、キッチンボーイの一

部の人は、この聖地を訪れるのははじめてと、
ペットボトルの空になったのに 『聖水』を汲
み、家に持ち帰ると話をしていた。

ある本によるとネパールは、チベット仏教と
ヒンドゥ教が共存しているので、神々の数は人
間より多いと載っていた。村々には、仏塔があ
り、壁の東西南北に目を書いてあり、人々をみ



わたしており、その不思議な目は、ブッタの慧眼を示す仏教のシンボルという。

話は変わるが、マルファの午後のひととき日だまりの中、石垣に腰を下ろしウォークマンを聞いていると、ひとりの子供が、ドッコ（竹で編んだ籠）を背負い道端へ落ちている馬糞、牛糞をうろうろしながら拾って歩いていたが、自分の前にさしかかったとき、盛んに何か話をかけてきたがわからなかった。そのうち、近ずいてきてウォークマンの一方のイヤホンをつかみ、自分の耳にさして聞いているのです。さっきより話かけていたのは、『聞かせて』と聞いていたのでしょうか!! 自分を見てにっこりです。

言葉は通じなくともメロディーはわかるのでしょうか、一生懸命聞いているのです。自分は

ドッコの中の糞の臭いがしますが、ガマンしながら唄が終わる30分以上まちました。

この国では、牛、馬、羊、犬、猫、鶏等あらゆる生き物が同居し仲良くいきているのです。どの集落を訪れても、小さい子供は、自分の弟妹を背負い子守する事は勿論、朝、道の掃き掃除、馬糞、牛糞拾い、リンゴ売り、ソバ穂の打ち（穂と茎の分離）と良く働く。

また、エクレバッテでは8名の子供がポリタンクの壊れたのを使って、山の砂の急斜面をソリにして、いっきに代わる代わるに乗って滑り落ちるが、我々なら余りの急斜面でしり込みするようなどころだ。

今回のトレッキングで出会った子供達の目の輝きは、とても澄んで美しく、自分の心がひかれるのを覚えた。

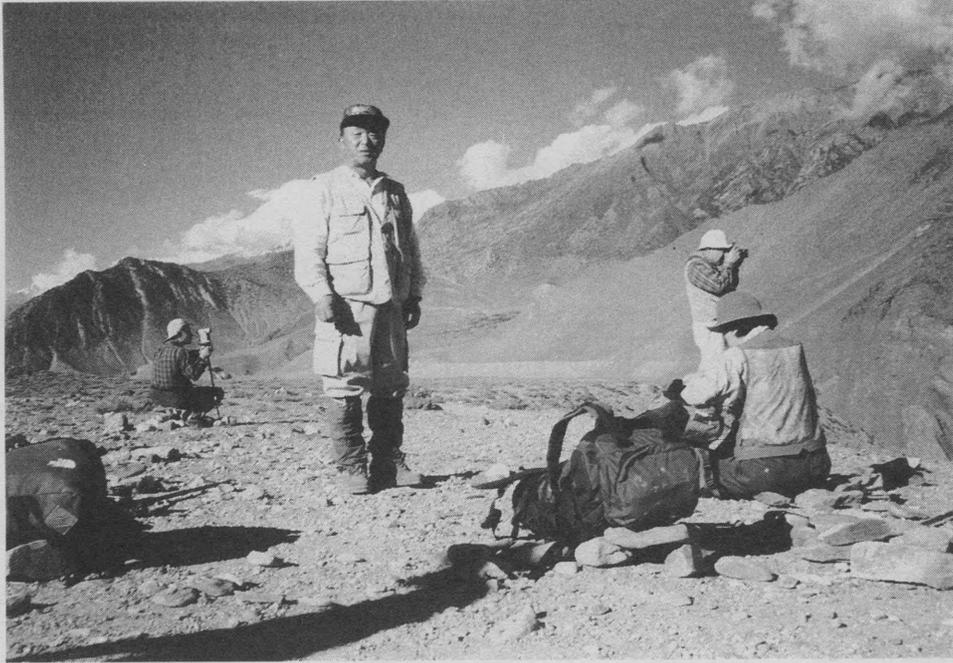
隊員のトレッキング紀行

ジョムソン街道トレッキング雑感

阿 部 勇 作

初日、大阪関西空港でフライト待ちのため一日停滞、現地カトマンズからポカラまで、深夜車で移動した際には身体にこたえた。然し、マルファの幕営地で、じっくり眠ってからは、幾等か自分自身をとりもどしたような気がした。ジョムソン空港に疲れ切った身体で降り立ち、始めて見るニルギリ北峰（6,040米）の白衣の切り立った姿に、眠気と疲れ切った自分自身がうそのように生気をとりもどし、すばらしいのひと言につきた。

ジョムソンの街をはなれKALI GANDKI RIVERの広い河原を、上流に向かって歩いているうちにアンモナイトの里エクレバッテに到着する。ホテル前の広い河原では、観光客らしき人達が三々伍々に何かを探している様子。また、街道を行きかう馬の隊列は、小さな体系（日本の道産子をひとまわり小さくしたような馬）ながら荷物を鞍につけて通りすぎてゆく、性格は温厚なようで、力もち、現地の人達の重要な交通機関のようなものである。



五日目、カクベニを出発して急坂を登りきって台地に出た所で、ダウラギリ I 峰を真正面から見る事ができた。純白の雪をいただいた山嶺を目のあたりにして、今回のトレッキングに参加して良かったと喜びが再びよみがえってきた。この頃から、隊員の歩調が少々乱れてきたように見受けられた。疲労が重なったのか、それとも高度障害の兆候が現れてきたのか、歩く早さをもう少し、ゆっくりする配慮があって然るべきではなかったかと反省させられた。

また、高所を歩く場合には、個人別健康管理

表を作成して毎日チェックする必要があるかもしれないのではないかと思った。

私は、三日目、十分に休養をとってからは、体調には異常はなく、行く先々の風景やその他のものに堪能し、現地の人達とも、それなりに交流を深めつゝ、また、私たちの料理を作って下さる料理に舌鼓をうち、毎日何んの支障もなく、楽しく行動できたことに対し、今回のトレッキングを計画してくれた方や、ツアーリーダー並びにシェルパほか関係者のご協力の賜と深く感謝申し上げたい。

隊員のトレッキング紀行

馬で行くヒマラヤ紀行

梅 津 博

関西空港で一日おくれとなった時は、あと一生行くこともない日根野という広がる沃野の中に、ポツンポツンと立つ、近代的な建物を背景に、豪農と思われる何軒もの落ち着いた古い建物がならぶ田舎町に寄れた事で、得した位に思っていた。

一日の遅れを取り戻すための、カトマンズからポカラまでのバスはひどかった。自分では結局一睡もしなかったと思っている。そして、つぎの夜も自分の勘違いでの睡眠不足に見舞われる事になった。時計がいつのまにか日本時間になっていたのである。何時か本で読んで以来頭

を離れない事がある。それは、『AB型は睡眠不足が一番こたえる』という事である。もうこれでおしまいである。そして苦難のトレッキングの始まりである。苦難を背負ってのムクチナート詣では、似合いといえは似合いかもしれないが、巡礼者の様な清い心になれないのがやはりAB型である。ストレスだけが、日毎に高度と共に溜まってくる。もともとナニカと高度には弱いと自認しているからなおさらである。自分の場合、高度の影響は消化器系統にでる事が何となく分かっている。今回は、すごい胃酸過多に襲われた。



そんなこんなわけで、馬のお世話になることになった。以前にシャンボチエで、馬に乗って行く現地の人を始めて見た時、ああこれだ！と思った。都会の車ではないか、あれはパジェロだ！の思いが強く、馬で天翔る夢があったことは確かである。何時かはパジェロを駆ってヒマラヤの山なみを越えてみたいと今でも思っている。

その後、荷を運ぶ馬は、ヒマラヤのごくありふれた景色として見てきたが、今回、ジョムソンからマルファに向かう途中で、人馬一体と言えるカッコいい光景を、目の当たりにしたからたまらない。この街道での馬は、荷物運びは勿論のこと、現地の人馬に乗ることで、良く利用している様である。そして、お客を乗せ轡を引く商売が成り立っている様でもある。後で知

ったがこの轡とりのことをホースマンというのだそうである。

馬からの眺めは、一言で言うならば抜群である。パジェロの比では無い。高くて窓があるわけでは無いのだから当然である。ただ、難点のひとつは、シートがパジェロ程よくないということである。お客様を乗せるからというのだろうが、ネパール絨毯を折りたたんだものだけだから、ケツが痛くなるのは仕様が無いといえは仕様が無いことである。それでも気分はジョン・ウェインである。ここはネパールというよりチベットの風景であるから、チベットウェスタンといえるかもしれない。現地さまの人の乗り方は全く様になっていた。マルファに行く途中と、帰りにジョムソン近くのカリ・ガンダキの河原で出会った騎乗者は、本当にカッコ良かった。難点のもうひとつは、寒いということである。エアコンがあるわけではないのだから当然といえは当然であるが、この日の夜は寒かった。ジャルコットからエクレバッティに下る途中に見

た、ヒマラヤの凍てついた夜空に、こごえる上弦の月の恐ろしいばかりの光景と、その光を受けて、網目状に青く、吸い込まれるように光るカリ・ガンダキの流れは、冷えきった脳味噌に電気ショックを受けたよりすぎましいものであった。そして、その翌日に見た、谷間の上昇気流に乗ってぐるぐると大きな輪を描きながら、尾根を越え視界から次々と消えて行く、カランコロンの群れは、夢の中でビデオでも見ている様な錯覚を感じさせてくれた。

今回のトレッキング中、馬に乗りながら、何回かビデオを回して見たものの、画面が揺れて見られたものではなかった。同じく馬で前を行く、仲間のカッコ悪い姿だけがクローズアップされていた。自分では、ジョン・ウェイン気分でも、やはり見られたものではなかったのだろうとひそかに思っている。それでも、思い掛けず馬に乗ったことで、何となく得をした気分になっている。

隊員のトレッキング紀行



菊池俊彦

ネパールでは、町なかの店でも、田舎の露店でも、行商人も、もの売りの子供も、最初にアンモナイトを観光客に売り付けます。

カリ・ガンダキ河に沿った村々の店頭

に並ぶアンモナイトの化石は、家内安全のお守りという宗教的な裏付けがあるのでしょうか、どれも立派な標本になる完全なものが多く、破片やかかけら等は無いようでした。だから、値段の折り

合いさえつけば、どれを買ってもアンモナイト標本として立派に通用するものです。

憶測ですが、ヒンドゥ教では、ビシュヌ神の化身が蛇であることから、アンモナイトは、とぐろを巻くビシュヌがそのまま石になったと信じたのかも知れません。そういえば、古代インドの宇宙観も天の川は宇宙を支配するビシュヌ神であったし、カトマンドゥの共同井戸では、ビシュヌ神が与えてくれる飲料水は蛇の口、まさに蛇口から溢れ出ています。加えて、瞑想にふけるブッダを、雨水から身を挺して守っているのも、ナーガという蛇です。

ガンガ（ガンジス）に続くガンダキ水系の源流には、ヒンドゥの聖地ムクチナートがあり、古代から現代まで、連綿と続く聖地への巡礼者にとって、アンモナイトは、お守りとして格好の土産物になったであろうことは、想像に難くありません現にカリ・ガンダキ河左岸のカグベニ村の古い寺院には、神聖な秘仏としてアンモナイトが祭られているということからも頷けます。

一軒茶屋エクレパッティ前のカリ・ガンダキ河原で、仲間と一緒に、30分ほどアンモナイトの化石拾いをしましたが、幸いなことに、殆どの方々がアンモナイトを手にはできました。

私も、化石を含む団塊（ノジュール）を5個ほど採集し、そばと一緒に化石採取する地元の老女に鑑定を依頼したところ、即座に、このノジュールには、アンモナイトは入っていないという返事でした。試しに割ってみると、小さな化石片だったので、老女の長いアンモナイト採取歴から得た鑑識眼の確かさには驚いてしまいました。

採集した学名の判らない直径15mmほどの化石を地元の4人の方に見てもらったところ、3人は直ぐアンモナイトと断定し、他の1人は、

「ここは眼、ここは歯でオバケの化石だ」

とって一笑に付したあげく、4人に共通した最後のまとめは、

「価値が無いから捨てなさい」

という言葉でした。捨てなさいは、「お守りにはならない」と言う意味だったのかも知れませんが。地元の方々は種類に関係なく、化石はすべてアンモナイトと言ひ、しかも、部分化石は勿論のこと、イノセラムスであろうとペレムナイトだろうと、ほぼ完全なアンモナイト以外は、全て無価値のものとして捨て去っています。もっとも、トリブバン大学理学部に、山岳国家ネパールに最も必要な地質学の専門家を養成する地質学教室ができたのが1967年ですから、岩手県は大船渡、曲がり屋の縁側でひなたぼっこの老婆が

「ゴトランド見に来たのかね、

サヨチュもう出ねよ」

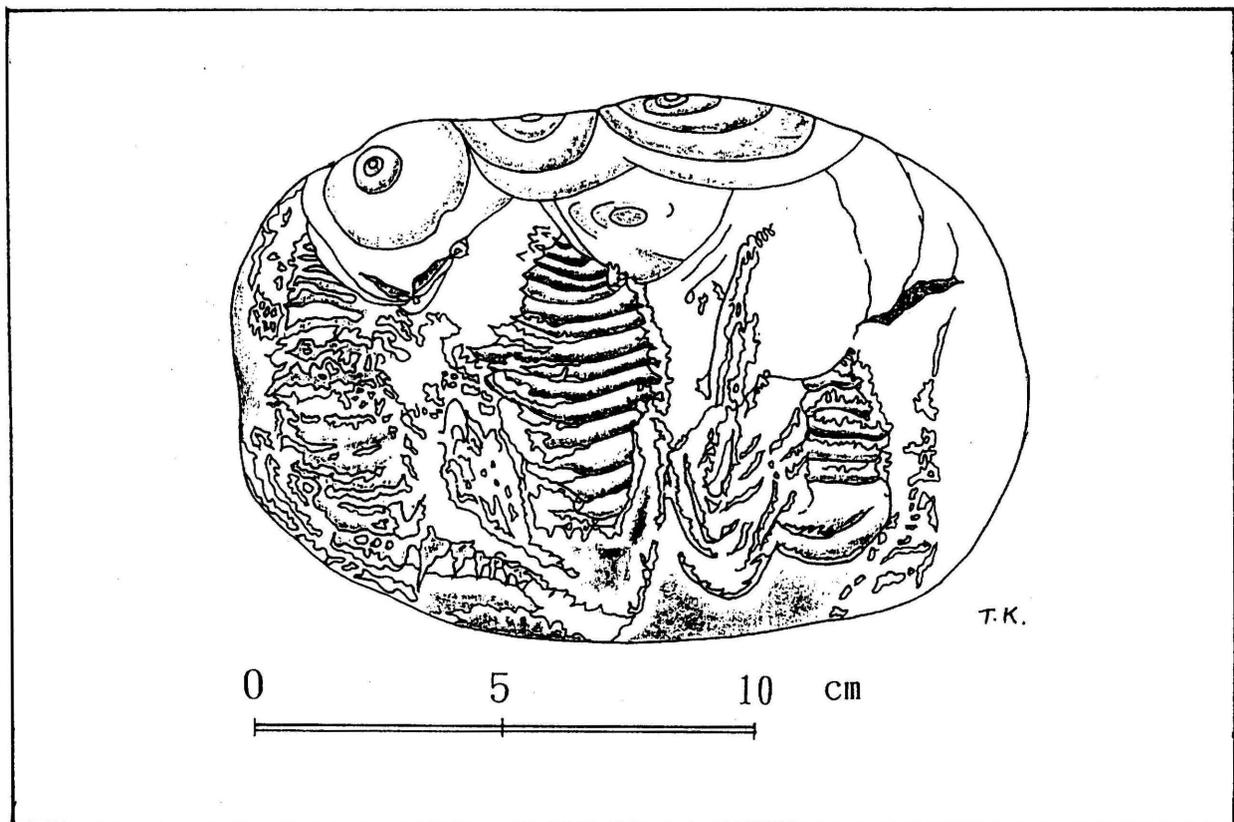
という訳にはいかないわけです。

アンモナイトは、綺麗な渦巻き状のものほど神聖なお守りとして優れ、学術的価値よりも、高価な商品としての経済価値を、大切にしているのは当たり前で、黄鉄鉱に置換したものは値段が少し高く品物も少ないようでした。

トリブバン空港の職員から、「すわ！テロリストか」との嫌疑をかけられる原因となった、「捨てなさいのオバケ化石」を、帰国後、貝化石では本邦屈指の権威、麻布大学名誉教授大森昌衛先生と、クモヒトデ研究においては、日本の代表的学徒、都立一橋高校石田吉明先生に送付し、同定していただいたところ、「ラン藻類」が作った化石「ストロマトライト」（図参照）という御教示をいただきました。

原始大気には、存在しなかった酸素を大量に作り出し、今日の大気の原型をもたらしたラン藻類繁茂の生痕、「ストロマトライト」です。

ラン藻類の化石では、建築材料としてコレニア（中国東北部産）が有名ですが、採集したオ



バケ化石は、まさにコレニアの仲間だった訳です。

ストロマトライトは、現在も、オーストラリア西海岸のシャーク湾で、ラン藻類によって作られつつあることが知られているものです。

ストロマトライトを作ったラン藻類は、35億年前に地球上に現れ、現在まで生き続けている原始藻類で、比較的浅い海岸の潮間帯で干満の差の大きいところに繁茂していたといえます。

採集した標本は、アンモナイトと一緒にだったことから、時代は「中生代」のものですが、ストロマトライトを作りあげた原始ラン藻類が、どのような種類だったのかは、ラン藻本体の化石が無いので推測するしかありません。

1億5000万年ほど前の地質時代に海底に繁茂し、ストロマトライトをもたらしたラン藻類。

アンモナイトが大きな眼でギョロリとラン藻塊を一瞥し遊泳した海底、巨大な首長竜類が躓いたかもしれないラン藻塊・ストロマトライト化石を採集したのでした。

トレックの合間を縫って、あんなにも楽しいひとときを作り、カリ・ガンダキに誘ってくれた隊員諸氏に35億年の思いをこめて感謝致します。

ヒマラヤを越える鶴

齋藤哲郎

私が、ヒマラヤを越える鶴の渡りの話を聞いたのは、今から10年ほど前になります。

あの小さな鶴が、越冬のためシベリヤ・モンゴル地方よりヒマラヤ8,000メートルの峰を越えインド方面へ飛来する話でした。

1,994年JAC訪台登山交流団へ参加した折、藤平会長、松田雄一氏ら10名で合歓山へ登頂し、宿泊した松雪楼で夕食後の歓談の時、前年、鶴を見にヒマラヤへ行って来た、松田雄一氏の熱っぽく語る30年来追い続けている鶴の話に、強く引き込まれて楽しい思い出に残る夜となった。しかし、場所がヒマラヤであり、私にとっては

遠い遠い世界の話として聞いていた。

今回、『ジョムソン街道トレッキング』参加に際して、コースがカリ・ガンダキ溪谷、そして季節が10月初旬であり、宿泊地がマルファ村である日程表を見て、密かにヒマラヤを越える鶴との遭遇に期待した。

10月7日、初日から日程の変更で、ほとんど眠らないままジョムソン飛行場に到着した。眼前のニルギリ峰の頂上は、厚い雲に隠れていたが、山の雄大さは充分感じられた。早朝なので名物の強風は吹いていない。今日の日程は宿泊地のマルファ村まで、約2時間カリ・ガンダキ



の河原を下る。NHKで放映された「世界いきもの地球紀行」で素晴らしい鶴の姿を撮影されたのも、このカリ・ガンダキ溪谷でありマルファ村だった。マルファの村は、白壁の家々と屋根に薪が高く積まれているのが印象的で、村の周囲は茶色の地肌を露出した山々が迫り、風除けのためか石堀に囲まれた畠には、ソバや小さなリンゴが栽培されていた。幻の逸品「アップルブランディー」の原料なのだろう。

鶴との遭遇は予想外に早くやってきた。10月7日、ジョムソンよりマルファには昼前に到着した。昼食までの時間を利用して村内散策に向かっていた10時30分頃、南風が強く吹き出し土埃が舞い上がり始めた頃、突然頭上遠くから甲高い鳴き声が聞こえ、思わず見上げた空に編隊を組んだ鶴の群れが目に入った。約200羽ほどの群れで、互いに鳴き交わしながらの飛行だ。一瞬、パニックになりそうな気持ちを抑えながらビデオのスイッチを押した。群れはダンプス側からニルギリ側へ美しいV時型の編隊を組ん

だり、二重、三重の横並びに変わったり、鶴の姿が黒色より白色に変化したり刻々とその姿を変えながら上昇気流をとらえ次々と視界から消えた。時間にして約2分程か、ビデオのファインダーから目を放し青空を見上げると点々と鶴の群れが見えた。しかし、それは残像のような錯覚でした。

思った以上に早々と簡単に鶴を見ることが出来たが、再度のチャンスを期待するあまり、四六時中空を見上げながらトレックする羽目になり、悪路で良く躓いて困った。

今回のトレックで鶴の渡りを観察出来たのは4回あった。第1回、第2回は10月7日のマルファ村で、第3回は10月11日エクレバッティにて4回目は10月12日ジョムソン村でした。マルファの宿で滞在して鶴を記録していた日本人の方が、昨日までに、数千羽の鶴が渡りを終えたと話していたが、あの大空を数千羽の鶴の姿を思い浮べて、何時か又の再訪を期待している。

隊員のトレッキング紀行

地球に誇る山岳観光地ネパール

菅原富喜

多種多様な人種と文化をもつ国、世界に誇る観光地の国ネパール、小生学生の頃、先生から聞いた、丸い地球儀を使って「地球の表面に数ミリの被膜あり、そこに海山あり、生物あり、表面地表には皺あり、地球で一番大きな皺、それがヒマラヤなり」と。

40数年をへて今、地球の皺、ロマンの国ヒマラヤへ、自分の目で確かめる久恋の旅でもあった。

空路、ポカラ～ジョムソン、大きな鋸の歯のように連なる7,000～8,000メートル級の山々が見える。ジョムソンから大河ガンジスの源流

カリ・ガンダキ川をトレック、見るも聞くもロマンの旅、ヒマラヤ山脈ができる迄およそ3億年、大陸プレートの衝突、長い年月をかけて造成、今も毎年数ミリ動くというロマンのある話日本の山には丸い石は見かけない、ここは山の上まで丸い石あり、アンモナイト化石がゴロゴロという信じ難い川辺の村に行く。トレック中ちらほら見えるダウラギリ、ニルギリ山群、天を突く穂先には白雪舞う高山、ふと思う日本が世界に誇る岳人、故植村さん、田部井さんなどの登頂快挙を偲び感激、又、異文化との出会いも大きな収穫だった。スタッフシェルパとの再会、トレック中、行きかう世界からの観光者、「ナマステ」とあいさつをかわした多くのネパールの人達、忘れ難い思い出として忘れることはないだろう。

『お世話になりました。ありがとう。』

最後に反省点として記す。

- ① 私、高度障害から来たものと想いますが、三日目あたりから体調をくずし、皆さんにご迷惑をかけ申し訳ありませんでした。
- ② このたびのトレック参加12名中、60歳以上6名、高齢弱者、時間配分が私にはきつかったようです。山歩きは最初の30分間、ペース配分大切。私はカクベニ〜ジャルコット間ですっかりペースを乱し、高度障害と相まってダウン以後、厳しいトレックでした。
- ③ 私の意見。トレックはゆっくり楽しむこと。ビデオ撮る人、スケッチの人、カメラの人、途中素晴らしい景観も、歩くので精いっぱいでした。又、各区間予定時間より全部早く到着となり、時間配分が惜しまれました。
最後にツアーリーダーの東さん、隊員の皆さんたいへん御世話になりました。ありがとうございました。



ジヨムソントレッキング雑感

長岡 昭雄



雲より白く、雲より高い、ヒマラヤの山々をほんの数日間、眺められたその喜びは、強い印象を受けた。

このたびの企画に参加出来た事は大きな収穫であったと夫婦して感じとっている。

準備の段階から楽しみだったヒマラヤの山々をトレック出来る事への気持ちで、心はゆさぶられていた。

カトマンズに到着した時の機内では、だれからともなく歓声がわき拍手が起こった。

町ではネパール最大の祭りがはじまろうとしていて、夜のカトマンズの人々は遅くまで、村々も賑わっていた。

ジヨムソン飛行場からマルファの道程、村人や子供達のかざりけのない人柄に接し、おぼえたての「ナマステ」を道ゆく人々に連呼、ひときわ子供達のひとみは明るくはれやかに見えたのは、嬉しかった。

マルファの村では石畳の敷かれた巾の狭い道の両側には白い壁の二階建ての家々が連なり、どこを見ても絵になる風景にじゅうぶん満足、家々の扉など等。

村の中央の石段を登った小高い所に、ゴンバがあり村々を一望できた。家々の屋根には青くはれた空にタルチョーが風に吹かれてひるがえっていた。

翌朝未明、サーター、シェルパ2名、ポーターと私達夫婦は、マルファを後にせざるを得なかった。梅津隊長、東ツァーリーダー、仲間みなさんの見送りを受けながら出発した。

足元をヘッドランプ頼りに照らしながら、霜柱の立つ道をサクサクと音を立て急ぎ足でジョムソン飛行場までの道程を歩き続けた。カリ・ガンダキの河原に沿って黙々と足を運ばせた。シャンの部落を通過する頃、山肌が未だ冷たく凍りついたニルギリが見えてきた。ちょうど

頂きには朝日が当たって、光輝く神秘的な美しさに私達は、何度も、何度も、振り返りながら眺めた光景は、忘れる事の出来ない思い出となった。

今回すばらしい山仲間とごいっしょさせていただき、多くの人々の暖かさにふれた体験は貴重な財産となりました。

みなさん大変お世話になりました有りがとうございました。

隊員のトレッキング紀行

ヒマラヤ 雑感

長岡伸恭

宏大かつ荒涼たるインナーヒマラヤの地に立ち今までのヒマラヤとは異なる情景と雰囲気何か新たな出会いを信じ期待させるものがあった。

神々はチベットのこの地に美しい自然の青と白を授け、人々に緑を果せる使命を与えたような、黄褐色の砂塵の舞う半砂漠化した中のジョムソンだった。

赤蕎麦の花畑や、風にはためくタルチョーに白銀のニルギリ（7,061m）やテリッツオ（7,134m）ピークが美しく映えるのが、大ヒマラヤ脊梁の北側の地なのだ。カリ・ガンダキ川に沿って聖地に近づくに従い、さらにその様相は増し対岸の岩肌に印された断層は目をみはるばかりである。ムスタン王国入口に佇み、真っ白に光るカリ・ガンダキの川石と、金色の夕日に

輝くチョルテンを目にし、信仰心のない者でさえ『これぞ聖地』とここから先に進みたい心境に駆られる思いだった。

カリ・ガンダキ川の一部はチベットを源としムスタン、ジョムソン、ツクチェ等を経てナラヤニ川となってインドへ流れ入る。村々の生活と聖なる祈りの川である。期待の一つは、このカリ・ガンダキ川でのアンモナイトの化石。砂塵の舞う中で苦勞して長時間探してはみたが… 勞多くして収獲無し、メンバーは皆それなりに、収獲したのだが、考えて見れば貴重な体験で贅沢な楽しい一時であった。

ツルの渡りは圧巻であった。テレビや話では聞いてはいたが、これほどの感動的な場面に遭遇するとは本当にハッピーの一語に尽きる。我々が見たのは、アネハツル（姉羽鶴）と思われ



る。ツルの欄を百科事典で開いて見ると、『世界には14種のツルが知られ、主産地は東北アジア。アネハヅルは日本に迷鳥として渡来する事も稀に有り、体型は多少小型、色は淡灰色で目の後方に白色のふさ状の飾り羽がある。』と記してあった。幾度もの旋回を繰り返しながら、上昇気流を求め高く高く舞い上がり、高度を確保するときれいな造形の編隊を組換えながらのヒマラヤ越えする姿に、米粒程になるまで空を仰ぎ見感動していた。

此れら我々の期待に応え、感動をチャンスを与えて呉れた今回のトレックの企画、実行に携わった関係各位に御礼申し上げますと共に、機会があれば、今度は多少なりとも宗教等の方も勉強し、別の角度と期待を求め幅広い視野で再度

ヒマラヤへ行ってみたいものである。
ダンネバー。

カリ・ガンダキとムクチナート

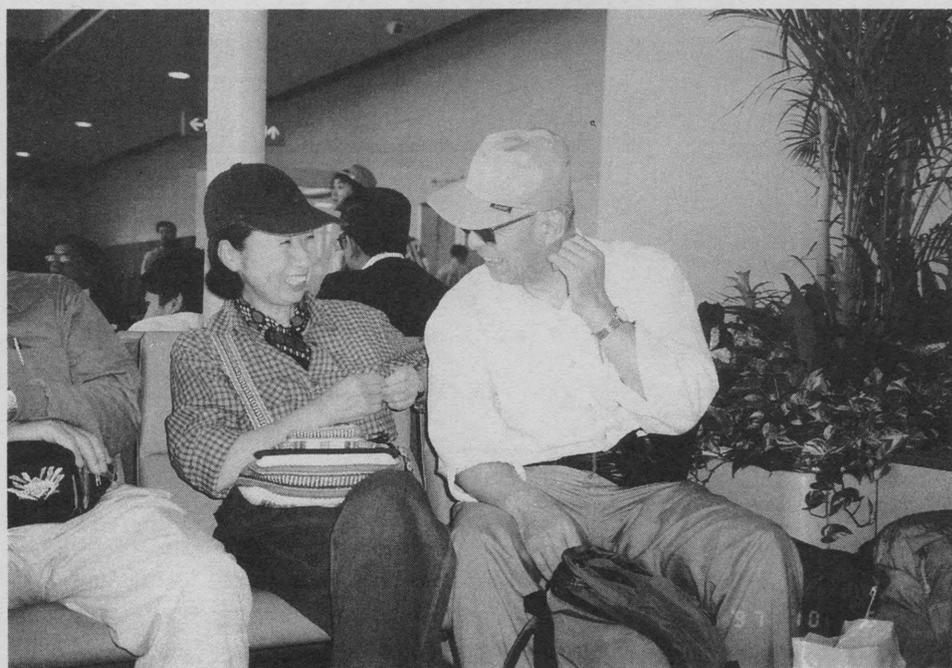
長谷川 利 貞

カリ・ガンダキ、ここは右側にアンナプルナ左側にダウラギリをいただき、V字谷の谷底にあたる。カリ・ガンダキの河原は風の回廊でめっぽう風が強く、砂ほこりを上げて突風が吹いている。年間降水量が200mm前後と極めて少ないところだ。インド洋で発達したモンスーンがここまで来る間に、ヒマラヤの高い山々にぶつかり、南側に大量の雨を降らせ、ここ北側には乾いた季節風を吹かせ乾燥地帯となっている。

カリ・ガンダキからは北西にダウラギリの主峰がくっきり見え、正面にはニルギリ北峰が真白く切り立ち、一つ一つの雪のひだまでが確認できる。

標高7,000mから8,000mのヒマラヤの山々が手にとれるように近く、本当にネパールに来ているという実感と感動があらためて湧いてきた。また、太古の海の生き物が、ここヒマラヤの3,000m近くの河原で、化石となって拾えるというのが不思議だ。カリ・ガンダキの河原で皆でアンモナイトの化石を探しながら歩いた。拾ったアンモナイトの化石は黄鉄鉱に変化しているのか金のように輝いて見えた。

カクベニから、ここムクチナートに来るまでは、荒涼とした砂漠、耳元でなる非常な風がすべて。



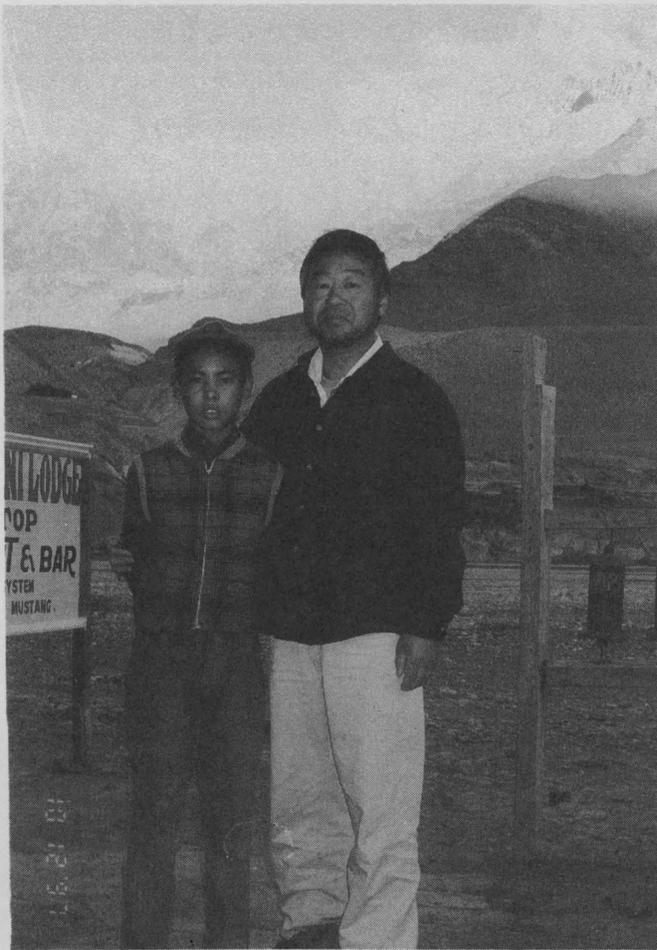
標高3,800mのここムクチナートからは、左手にはひとときわ高いダウラギリI峰(8,167m)ツクチェピーク(6,920m)が眺められる。皆でテンプル(寺院)にお参りにゆく、沢山の敬虔なヒンドゥ教徒の人々が参拝に来ている。各人パンツいっちょうになり、龍の口から流れ落

ちる百八の滝の水を頭から水を浴び、さらに寺院の前にあるプール状に水がためられた10m位の池に、頭まで沈めてお参りしていた。

百八というのは、日本で行う大晦日の除夜の鐘の百八と同じ意味で、百八の煩惱の数々を滝に打たれて清め流すということらしい。

隊員のトレッキング紀行

一日おくれのカトマンズ 三浦 繁 司



山行前のドタバタ劇でつかれながらも、ホットした気分でのジョムソントレックの出発であったはずである。関空での飛行機故障の足止には、出鼻をくじかれてしまった。

カトマンズに着くと、今度は、チャーターしたバスでポカラまでの田舎の夜の旅である。飛行機が飛んでいればつかれをいやし、山行の話しも出来たであろうが、不幸にも、頭をガラス窓にぶっつけながらの仮眠である。トイレ休憩で道路わきで立ションをしながら家の中よりもれてくる電球の明りを見て、今日の一日を思い出していた。

私は、小さいころからそばのはなは白で、茎は青と聞いて育ったが、マルファに着いてそば畑の花は終りに近くになっていたが、話しに聞いていたピンク一色にはおどろいた。

ジャルコット周辺の登山道のわきに

大きな石かと思ってみると、アンモナイト化石の入っている石が所々に見られた。

エクレパッティで鶴が上昇気流に乗って渡る姿を見て感動し、今度は、各自が風の強い河原に、アンモナイトの入っている石をさがしに行き、河原で割って見るがなかなか化石は入っていない。5～6個拾って帰り、ホテルの子供に石を割ってもらいアンモナイトがでてきた一品は、すばらしく、カリ・ガンダキ河でのアンモ

ナイトひろいは私の一番の思い出となった。

又、周囲の山々を見ながらチベット仏教とヒンドゥー教の聖地見学が出来、大変すばらしい思い出となった。

『今回のトレッキングでは、諸先輩の方々のご指導をいただき本当にありがとうございました。』

隊員のトレッキング紀行



田 中 洋 子

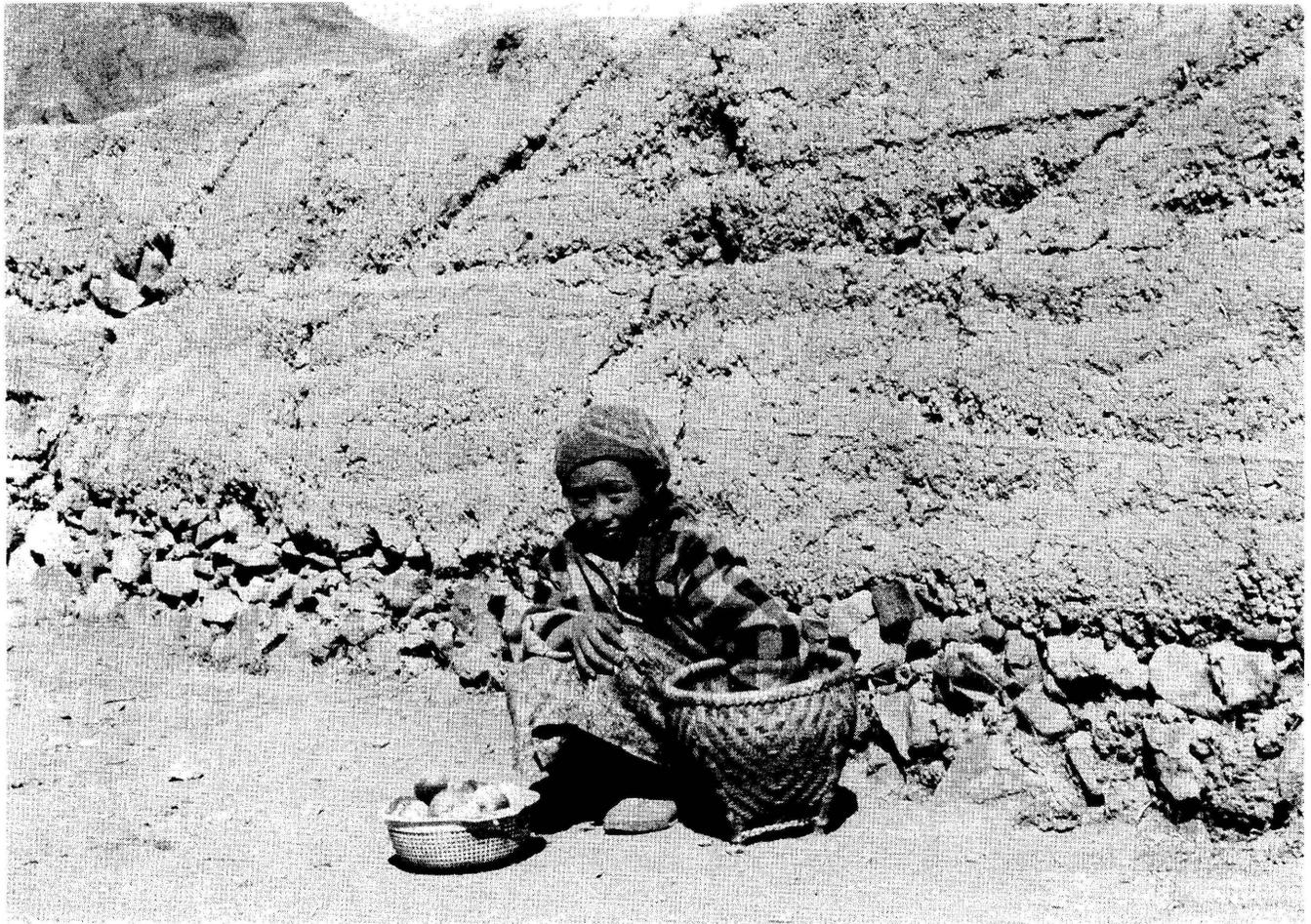
ヒマラヤの山旅は、ナマステ（こんにちは）で始まりました。

ツアーリーダーの東眞理子さんと一緒に旅ができるのも楽しみで、夢と希望と期待で一杯の私はわくわくでした。それに昨年のスタッフも何人かいると聞いて、再会の言葉をネパール語で言おうと思いました。あなたにお会いできてうれしい（タバーインラーイ・ベテラデーレ・クシーラ・ギョ）この言葉を覚えた私は誰かに言って、試してみたくなりました。カトマンズへ向かう飛行機の中で知り合いになった、雑貨商の人にタバーインラーイを言ってみました。ちゃんと通じて気を良くした私は、再会したスタッフにも連発してひとりでうれしがっていました。でも、別れの時言おうと覚えた、またお会いしましょう（フェリ・ベトウンラ）は胸がつまって、涙があふれて、とても言葉になりま

せんでした。

ジャルコットのテント場の空き地で、三浦さんと私は、村の子供たちと石けりをして遊びました。身振り手振りで、手本に一回して見せると、子供たちは、すぐ覚えて面白がって何回もしていました。そのなかの一人が、小さい子をおんぶしても片足で、ケンケンパと飛んでいるのでびっくりです。三浦さんと私は、息切れしてとても子供たちのようには続けられませんでした。今回のジョムソン街道トレッキングは、ニルギリ北峰はじめ、ティリツォピーク、ダウラギリI峰、ツクチェピーク他の素晴らしい山々を眺め感動の日々でした。アンモナイトを沢山拾う事もできました。あまり沢山あったので空港で荷物を調べられました。

マウンテンフライトで、青空に広がる大パノラマ、そして、エベレストを見ることができ最



高の感激でした。隊員のみなさん、東眞理子さん、スタッフのみなさん、大変お世話になり、本当にありがとうございました。お陰様で楽しい山旅ができ心から感謝しています。

フェリ・ベトウンラ！

見上げれば ツクチェピークのいただきに
風に流れる 君の歌声



思わぬアクシデントに見舞われて

長岡 五百子

10月8日早朝5時30分、マルファのバッテリーをシェルパに背負ってもらい出発。ジョムソン7時のフライトに間に合うよう急いだ。外は肌寒い。サーダーとシェルパ2人、それに私たちの荷物をはこんでくれるポーター1人、主人と私の6人は、まだ薄暗い山道を無口で歩く。シェルパ2人は太っている私を背負っているので息づかいが荒い。10分間隔で交替しているようだ。ちょっとした不注意が、この上もなく申し訳なくって「ごめんなさい」としか口からでない。ニルギリの山に朝日が当たり回りが明るくなってきた。背負われながらすばらしい山々を見渡す。6時半飛行場につく。茶屋にたのんで温かい紅茶を頂く、寒かったのでとてもおいしい。送ってくれたスタッフに深々と頭を下げ再会を約束して飛行機に乗り込んだ。

7日の夕食後、全く予期せぬ出来事が起きてしまった。ヒマラヤ越えをする鶴を撮りに2年続けてきた日本人、マルファの町を馬に乗せてもらった菊地先生の友人の話聞きながら、たのしい食事を済ませてテントに帰る時のアクシデント。右足が横にすべって激痛が走った。態勢を整えようとしたが足が着かない。力が入らないのだ、内側に出っ張りが見える。「捻挫」「骨折」「アキレス筋が伸びたのか」と声が飛んでいる。この痛みは初めてだ。梅津隊長にテーピングをもらい、熱さましシートを貼り、痛み止めを飲んで休んだ……。ジョムソンを離陸してからずっとその事を思い出していた。今日

から本格的に始まるトレッキングに出鼻をくじいた様で、皆さんには申し訳ないと思う気持ちでいっぱい。どうか私たちの分までも楽しんできてと機内より願っていた。

ポカラではサーダーの友達ダサングさんが、カトマンズでは日本語の話せるソミサンが迎えに来てくれていた。徹底した連絡の良さにホッとす。カトマンズの病院では、日本へ帰る手配を済ませた事を理由に、ドクターへ話をつけてくれた大河原さん。皆さんに大変お世話になりました。

夕方遅く、シェルパホテルに着いた時は、朝から食事をとっていない事に気がつき、急に食欲を覚えて、今日一日の忙しさを振り返り、短かかった旅の最後の夜をゆっくり過ごす事が出来た。

大河原さんの見立てで、帰りの飛行機はすべてビジネスクラス。待遇の違いにびっくりしながらも、シンガポール空港内にあるラウンジでゆっくり時間を過ごした。10日早朝成田に到着、アトラストレックからの連絡で車椅子と名前のカードをもって私達を待っていた。おどろいた事に、ここから先の移動計画がFAXで届けられ、時間と役割名が記されており、何の不安もなく移動する事ができた。アトラストレック社の、スピーデーで、心のこもった対応には頭の下がる思いです。出迎えに来た家族からも随時FAXが入り、心配なく待つ事が出来たことを聞き、改めてすばらしい旅行会社に巡り逢えた事にお

礼を申し上げます。一緒にジョムソン街道を目指した仲間には大変お世話になりました。もちろん志半ばにしたネパールにも、また行こうねと、感謝を込めて主人に話ししている処です。

最後になりましたが、ツアーリーダーの東さ

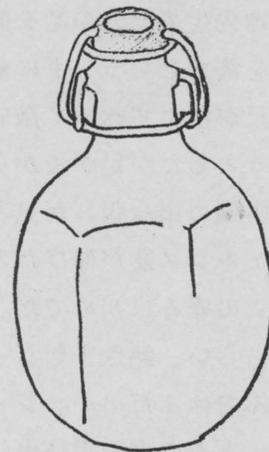
んには一方ならぬお世話になりました。誠にありがとうございました。またご縁がありましたら是非ネパールにご一諸させて頂きたいと思っております。



トレッキングに参加して 短歌

カタカナの国に足着き見渡せばひときは白い山の連なり
また行こう思わぬ怪我にすまないと夫にささやく感謝の言葉
真夜中に花つみ作業命がけにおいの姿目の前にあり
ほっとする故郷の山吾らの顔怪我も忘れてつきぬ話題

五百子



アンモナイトを求めて カリ・ガンダキ河原を歩く

ツアーリーダー

東 真理子

小型飛行機で、ジョムソンに降り立つと、そこは、真っ白なニルギリを間近に仰ぐチベット文化圏。人々の顔立ちも、我々と同じような顔をしたチベット系の人々が、ほとんど。

聖地ムクチナートまでのトレッキングが始まる。カリガンダキ河原を歩きながら、目はいよいよ足元の小石に、ひきよせられてしまう。『ひょっとして、この石の中にアンモナイトがかくれているのでは……?』と気になる。腰をかがめて、ひろって見るのだが、シェルパにみせると「ただの石ころだ」とポイッと捨てられてしまう。それでもあきらめきれず、頭の中は、古代へのロマンと欲とで、つつい目には、足元の石ころに行ってしまう。

菊地先生から、アンモナイトについて話を伺う、そして、ますます私の心は、アンモナイト

に対する想いと比例してふくらんでゆく。ジャルコットの村で見たアンモナイトの巨石には、驚ろかされる。村の通り道にある岩が、実はアンモナイトであった。畑の中の岩が、これもアンモナイトであった。そして、私は幸せな気分になった。

帰路、ジョムソンに向かう手前のエカラバティで、偶然ヒマラヤを越えて、インドに渡るアネハヅルの一群を見る事が出来た。白い神々の峰、そして、どこまでも高い青空。ひたすら、上昇気流を探すために、青い大海をおよぐような一群を見ていると、私の中で、時は止まった。

カリ・ガンダキの河原ばかり見て歩いていた私は、白い峰々とアネハヅルが、とても新鮮に見えた。



トレッキングを終わって

梅 津 博

『ジョムソン街道トレッキング』は、参加隊員12名により、1,997年10月4日から10月15日間の12日間行われました。

このトレッキングは、支部行事としてのヒマラヤトレッキングシリーズの第3回目で、第1回がエベレスト山麓、第2回がアンナプルナ・ダウラギリパノラマに続くもので、大雑把にネパールヒマラヤを駆け巡った感じとなりました。これらトレッキングに参加された方々は、第1回が7名、第2回が13名、第3回が12名で、延べ32名となっております。実人員でみると、18名となっております。これを、多いとみるか、少ないとみるかは、評価の分かれるところですが、3回とも参加された方となると、僅かに4名に過ぎませんでした。

計画を実施した時期は、第1回が年末年始の休暇を利用、第2回がゴールデンウィークの連休を利用と会員の方が参加しやすい時期を選んできました。そして、今回は、祭日を有効に利用した時期を選んでみました。その中で参加された方をみると、第2回、第3回と続けて参加された方が8名もおられました。それだけヒマラヤの魅力はすばらしいもので休みとには、余り関係がないのではと思ったりしております。

さて、今回のトレッキングは、前回の失敗をした往復の航空券確保を、まず頭に入れて計画を組むことになりました。これは、旅行会社からも早期に参加者の氏名をもらいたいとの要望が第一にありました。早い機会に氏名が分かれば、航空券の確保がより有利になるわけです。前回は期日が迫っていたわけでもありませんが、全員同じ便に乗れないことになってしまい、その外にツアーリーダーの分まで回し、ツアーリーダーなしの団体旅行になってしまい、添乗員の仕事まで引き受ける結果となり、反省していたところでした。今回は、その轍を踏まないよう、出来る限り早期（2月末日）に名簿をまとめるということが会員から理解をいただき、全員の航空券の確保がもう3月12日に出来、参加者の旅行代金払い込みも出発1か月前に終わり、ひと安心というときに考えてもいなかった追加申し込みがありました。こちらの意図したことが、会員に広く伝わってなかったとしかいえず反省させられました。会の行事ですので広く会員から参加していただくのが当然ですので、この際、旅行会社から泣いてもらうことにしたわけです。こちらも、このために計画書の割り付けの変更から印刷のやり直し、そっちこっちへの連絡など、仕事を抱えることになってし

まいりました。それはいいとしても、帰りには、ツアーリーダー用の航空券を回すことになり、ツアーリーダーが不在ということになってしまい、往のようなトラブルがあった場合の事を考えると、これからは、計画に影響を与える変更については、より慎重に対処しなければならないものと勉強になりました。

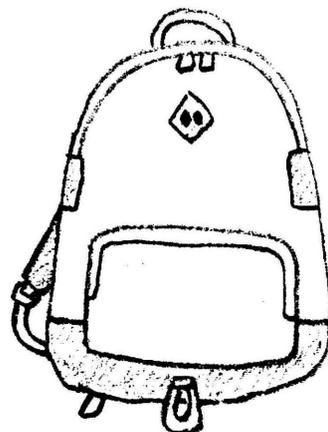
今回ばかりでなく、3回のトレッキングを振り返ってみると、参加を機会に支部会員となられた方もおりますし、ネパールヒマラヤを写真におさめ、ライフワークに輝きを加えことは勿論、展覧会や、講演会の講師までつとめられたとお聞きして、計り知れない影響を会員の方々にかたちとしてはもとより、心の中にまで与えたものと確信しております。

ただ残念だったことは、年配者、初心者を考えて無理のない、緩い計画をたてたにもかかわらず、年配者の参加がなかったことは、非常に残念なことでした。無理のない、緩い計画といっても、実際には常日頃の山行がたたったのか、決して楽なトレッキングでもなかった場面もありました。トレッキングといっても、単なる観光旅行とか、楽しいだけの撮影旅行とかの見方からすれば、当然のことですが、山の会のトレッキングは、登山として考えなければならない要素がたくさんあることをあらためて銘記すべきだと思います。

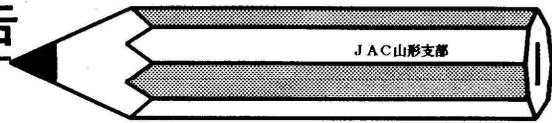
参加されてヒマラヤの光と風を受けられた方々が、これから如何にヒマラヤと相對して行くかは、それぞれ個人の考え方だと思います、深く人文地理などの考究に努められる方、山や風物の写真に精を出される方、引き続きトレッキングを楽しまれる方、あるいは、ピークハンティングに向かわれる方など多様な進み方があると存じますが、この3回のトレッキングで得られた無数の心に残った思い出を励みとしていただけるものと信じております。

ツアーリーダーが単なる添乗員でないことは、明白ですが、今回の長岡五百子さんの事故の際、適切に対処していただいたことには、敬意を表し、感謝するよりほかありません。ほかの旅行会社が、こういう場合どう対応してくれるか分かりませんが、一言でいうならば良い人と会社に出会ったといえるのではないかと考えております。

最後に、頭の痛みに耐えながら、消化不良に苦しみながら、そして心臓が破れそうになっても、それでも、また、ヒマラヤの空気に触れてみたいと思うのは、私だけではないように思っています。



支 部 事 業 報 告



平成8年度の事業概要

支部の総員は、60名を越える。この中で、常時支部の行事に参加するのは、15.6名前後であるが、なるべく多くの会員が参加できることを心掛けて山行をはじめ行事の計画を組んでいる。

平成8年度は、支部総会ではじまる。この年の目玉事業「ヒマラヤトレッキング」の準備会を兼ねて、山形市内の「教育会館」で28名の出席を得て4月24日開かれた。事業報告、予算決算と8年度の事業計画を話し合った。

支部事業は、4月25日から5月6日までの「アンナプルナ・ダウラギリパノラマトレッキング」から始まった。13名が参加しまずまずの好天も幸いして、中高年の意気を示した楽しい海外トレッキングとなった。

同じ5月15日には、摩耶山周辺で清掃登山を行った。清掃登山は、支部行事に毎年組み入れられてはいるが、最近の山は断然綺麗になったというのが実感である。この行事には、2名の参加があった。

6月8日・9日には、「長井葉山」に登った。小国町の施設に泊り、翌日は、朝日山麓を歩き手打ちそばを心行くまで味わった。これには、12名の参加があった。

6月22日から一泊で行なわれた。東北ブロックの集会と登山には、雨模様にもかかわらず秋田の名山「太平山」を15名が登りきった。秋田支部に感謝申し上げる。

7月14日は、日帰りですぐ隣の福島県の「猫魔岳」に登り、「雄国沼」まで足をのぼし、水辺とニッコウキスゲの群落を、15名が堪能した。

7月20日・21日には、9名が参加飯豊山荘に一泊し、石転び沢を中心とした「飯豊山を満喫しよう」が行なわれた。この年は、残雪が多く沢を埋め尽くしていたが、雪の消えるのを追っかけながら花が咲き乱れており、参加者を満足させてくれた。

8月に入り、23日から二泊で、7名が「尾瀬と会津駒ヶ岳」へ出かけた。天候も幸いして楽しい登山と湿原を満喫した。

9月には、これも二泊で14日から16日まで「秋田駒ヶ岳から乳頭山」までの縦走を行なった。秘湯を巡りながらの山旅は、7名の参加者の心を和ませるものがあった。

10月10日から13日までは、北アルプスの「唐松岳と白馬大池」に5名が向かった。連日好天に恵まれ、東北の山と違ったアルプス景観を満喫した。

10月18日・19日の本部集会委員会が摩耶山で行なわれたが、これには、2名が参加して交流を深めた。

10月26日・27日は、『鳥海山よくばり山行』が行なわれ、23名が参加した。ここ2・3年恒例となっている鳥海山清吉新道の散策山行と、頂上登頂が試みられたが、新雪と風に遭遇して途中下山した。

11月10日、初冬の日、神室連峰『小又山』の登山が、13名参加して行なわれた。本格的な冬のおとづれる前の山の一日を過ごした。

11月の末、23日から27日まで、まだ暖かい屋久島に7名が渡り、雨の『宮之浦岳』を登った。千年を越える命を持つという杉とのめぐり逢いは、参加者の心をとらえた。

12月に入り、7日に行なわれた東京の『晩餐会』には、10名が参加し会員と交流した。12月14日・15日には、『山形支部の晩餐会』が日本海の波打ち際にたつホテル八乙女で行なわれた。この時は、会員の約半数23名が出席し、大いに気炎を上げた。

年が変わり、1月19日には、9年度事業として組み入れる『ヒマラヤトレッキング』の説明会が山形市内の「教育会館」で16名の出席を得て開かれた。

2月8日は、山形市から望見される『笹谷峠と蛤山』へ日帰り6名が雪と親しんだ。

2月15日・16日には、支部恒例の蔵王山『樹水原を滑る会』に20名が集まり、モンスターの中を華麗に舞った。

3月には、最後の行事として、『安達太良スキー』が行なわれた。福島県沼尻高原に11名が集まり、山形と違った雪の感触を味わった。

そのほか、本部主催の支部長会議、各種委員会には、その都度出席をしている。

いずれにしても、当支部の構成員ほとんどが、他の山岳会との二重加入が多くこれらとの調整が一つの課題とはなっている。しかし、行事に参加するのは、これら二重加入の会員に多く、山への意欲が感じられる。会員も暫時多くなりつつあり、わかい層に期待はしなければならないが、年配者なりの山行は、今後とも進めて行かなければならないのが現状と踏まえている。

この年は、3名の入会があり、1名の物故会員があった。物故者は、佐藤俊一氏で鳥海山を始め山の写真では、名を知られたが、これからという矢先のことで惜しまれる。会員番号は12,119である。ご冥福を祈る。（文責 梅津 博）

平成9年度の事業概要

平成9年度は、『支部総会』ではじまる。この年は上山市内の「山城屋」で22名の出席を得て4月20日開かれた。事業報告、予算決算と『ヒマラヤトレッキング』を含めての9年度の事業計画を話し合った。前日の4月19日には、総会記念登山として、蔵王山の展望台、『上山葉山』に5名が登った。

5月25日には、『雁戸山周辺』で清掃登山を行う予定であったが、生憎の悪天候で中止となった。清掃登山は、支部行事に毎年組み入れられてはいるが、最近の山は断然綺麗になった。

7月6日には、『栗駒山と世界谷地』に8名が出かけた。山形からの日帰りとなると少しきついが、出発の時の悪天候は、頂上で晴れあがり十分満足のゆく登山であった。

7月19日から二泊三日で、岩手県内の『早池峰山』『岩手山』『七時雨山』を7名が駆け巡った。年配者には、少々きつい山行ではあったが、花の美しさは十分堪能した。

8月5日・6日は、山の鼻に一泊して『至仏山』を3名が登った。山の鼻コースが解禁になったばかりであったが、尾瀬が原と燧岳が奇麗に見え、尾瀬を側面から見ることができた。

8月30日から秋田と岩手県の県境に横たわる『和賀岳』と『真昼岳』を一泊で登った。二つの山とも自然そのままに登山道も藪に埋もれている味な山であった。そして懐の深い山だった。

9月に入って『全国支部集会』が、越後支部の主管で9月20日行われ、その登山が、9月21日に『黒姫山』で行われたのには、5名が参加した。そして支部集会終了後、1名を加えた6名が『越後駒ヶ岳』と『浅草岳』を目指したが、悪天候のためいずれも登頂という目的は果たせなかった。

10月14日から15日間では、今年度最大の事業の『ジヨムソン街道トレッキング』が12名参加して行われた。勤務を離れての12日間は長い、ヒマラヤのトレッキングには短い思いを残して、終わった。3年続けて実施したヒマラヤトレッキングもこれで終わって、また別の計画に取り組むことになる。

10月11日・12日行われた福島支部の50周年記念『東北集会』には、多数のメンバーがネパールに出かけたこともあって、1人の出席にとどまってしまった。福島支部にはあらためてお祝いを申し上げたい。

10月25日・26日には、恒例の『清吉新道探勝』と今年始めなくなられた佐藤俊一会員をしのんでの『追悼登山』が行われた。地元を中心として、12名の会員があつまった。

年も押し迫った12月13日・14日には、支部恒例の『支部晩餐会』が蔵王温泉で賑やかに行われた。行きはまだ少なかったが、シーズン初めのスキーに精を出す会員も少なくなかった。

年が変わり、2月7日・8日には、『蔵王樹氷原を滑る会』が15名参加して行われ、たまたま行われていた樹氷のライトアップに喚声を上げたり、華麗に樹氷の中を乱舞して心行くまでシュプールを残して終了した。

3月14日・15日には、今年最後の行事である鳥海山の『稲倉岳』のスキー登山が10名参加して行われた。当日は春の嵐に見舞われたが、元気だけは嵐に負けない思い出を残して本年度を締めくくった。(文責 梅津 博)

◆おことわり◆ 報告特集に出てくる地名等について、行動記録では統一しましたが、隊員のトレッキング紀行では原文のとおりとしました。

編集後記 「ジヨムソン街道トレッキング」から半年になろうとしています。なんだかんだの日々を経てようやく特集号を届けることができました。執筆していただきました方にはまずお礼を申し上げます。全てが手作りですが、ワープロは、梅津、田中、菊池、長岡、校正は、田中、梅津、會田、長岡、三浦、が担当しました。編集を担当した委員はこれでトレッキングがようやく終わった感じしております。(梅津) ◆編集委員◆ 長岡伸彦・菊池俊彦・會田茂雄・三浦健司・田中洋子・梅津博